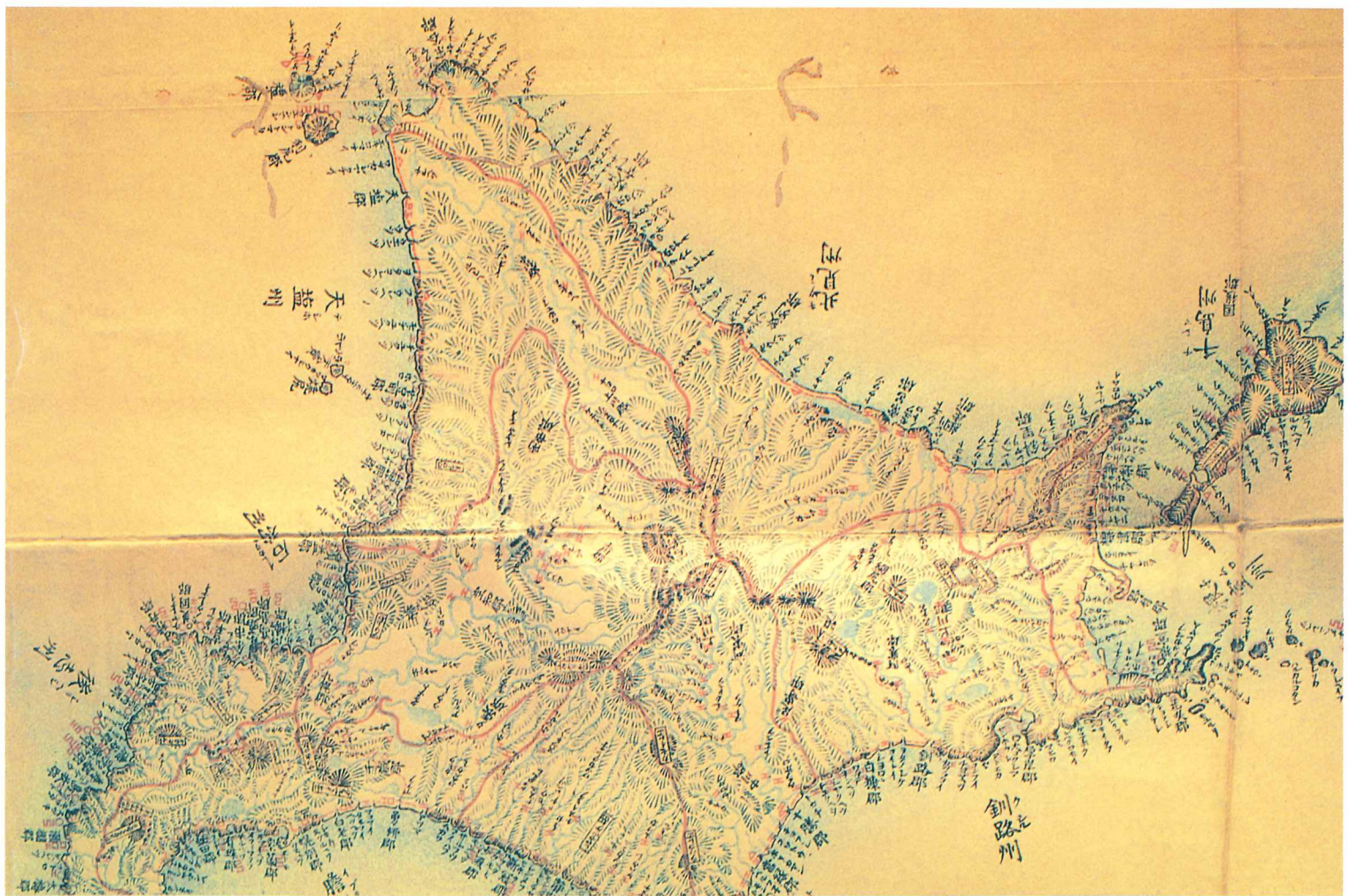


士別市郷土研究会創立40周年記念

士別地方アイヌ語地名考



北海道国郡全図 松浦武四郎作(1869年)北海道 蔵

士別市郷土研究会

士別市郷土研究会創立 40 周年記念

士別地方アイヌ語地名考



ナイタイベ（内大部）にて（「天塩日誌」より）

士別市郷土研究会

発刊のことば

士別市郷土研究会会長 荒 木 正 一



戦後の混沌とした世情が、漸く落ちつきを見せた昭和32年、郷土の繁栄は歴史の積み上げの成果であるとし、遺跡、史蹟の調査保存の重要性を痛感した郷土の先輩諸兄は、昭和32年に

郷土研究会を発足、自らの資金と労力を投じて、遺跡の調査や歴史遺産の保存、古老座談会を開くなど謙虚に活動を続けました。特に先住民族アイヌのマス捕り小屋や、住居跡の位置確認のために北風磯吉翁を招き、リイチャニやサツテクベツの調査をし、ニシパコロ居住跡史蹟碑を建てなど、多くの実績を積み上げて来ました。

平成9年に郷土研究会は創立40周年を迎えましたが、時を同じくして上川支庁主催の「松浦武四郎フォーラム」が士別市で開催され、道内外から多くの武四郎研究者が集まり、天塩川沿岸地域活性化の提言など多くの成果を収めました。翌日は士別、名寄、美深の郷土研究会員による実行委員会でセミナーを催し、更に多くの武四郎研究の発表を聴講する機会を得て、改めて認識を新たにした次第ですが、当会々員の尾崎功氏も「士別市内における武四郎の事跡、川筋をもとに」を発表しました。それが動機になりアイヌ語地名の深い意味に感銘し、忙しい学務の傍らアイヌ語地名の追跡確認を行い、ここに「士別地方アイヌ語地名考」執筆を完了し、当会創立40周年記念特別号を編むことが出来ました。

省みますと、士別市も屯田兵が入植して百年の節目を迎えますが、出版に際しては士別市教育委員会の文化振興補助と、上川支庁の21世紀のふるさとづくり支援事業補助を頂きまして、心からお礼を申しあげると共に、天塩川沿岸地域の方々と道内広く、参考にして頂ければ幸いと感謝を申し上げて発刊の言葉と致します。

発刊を祝して

士別市長 田 莉 子 進



士別市郷土研究会創立40周年を記念して「士別地方アイヌ語名考」が発刊されますことは誠に喜ばしく、心からのお祝いを申し上げます。次第であります。

顧みますと、郷土研究会は昭和32年に創立され、爾来、この地域における先住民族アイヌの歴史をはじめとして、開拓そして発展隆盛の貴重な調査研究を中心として多くの実績を残されてきたところであります。このことは偏に、歴代会長をはじめとする会員の皆様のご努力の賜であり、ここに深く敬意を表し、感謝を申し上げます。

本年士別市は屯田兵が入植してから100年という節目の年を迎えます。この年にあたり、私たちは先人のかけがえのない歴史を振り返り、そのご労苦を偲び感謝するとともに士別市2世紀へ向けての新たな出発の年となるよう努めなければならないと存じます。ご承知のとおり、北海道においては数多くの地名がアイヌ語から生まれたものであります。

先住民族の歴史がこのような形で、今もなお私たちの生活のなかに息づいておりますことは大変意義のあることであり、当時の風俗習慣を偲び、私たちの郷土についての知識を深め、さらなる発展への礎となるよう、本書がより多くの皆様の回想と興味を呼びおこしていただく契機となりますことを願ってやみません。

結びとして申し上げますが、本書の発刊にあたりご尽力されました郷土研究会の今後ますますのご発展と会員各位のご健勝とご活躍を祈念いたしましてお祝いのことばといたします。

発刊を祝して

北海道上川支庁長

湯 浅 国 勝



この度、士別市郷土研究会の創立40周年を記念し、「士別地方アイヌ語地名考」が発刊されますことを心からお喜び申し上げます。

本研究会は、昭和32年の発足以来、郷土史・史跡・文化財の調査研究、郷土資料の収集、交流事業をはじめとする各種事業を開催するなど地道に郷土史の調査・研究を積み重ねられ、士別市はもとより上川管内の郷土史の研究の充実・発展に大きく寄与してこられました。そのことに対し深く敬意を表すとともに、会員の皆様の日頃のご努力に対し心から感謝申し上げます。

上川支庁としましても、平成8年度から3年にわたり実施した「天塩川流域活性化推進事業」として、「天塩川」をキーワードとした流域の活性化に取り組んでおります。その中でも、歴史的・文化的な側面から天塩川流域の活性化を図るために「北大河・テッシ〜松浦武四郎まっぷ〜」、「松浦武四郎フォーラム」を作成・開催しましたが、道内はもとより道外からの反響も大きく、改めて、郷土文化に対する関心の高さを認識したところであります。

この度、本研究会創立40周年の記念として、「士別地方アイヌ語地名考」が編さんされましたことは、これらの郷土文化に関心を寄せる多くの方々の期待に応えるものであるとともに、今後、天塩川流域地域の郷土文化の向上と地域の振興に大きく寄与するものと期待しております。

最後に、輝かしい歴史と伝統のある士別市郷土研究会が、会員相互の連携を深め、新たな研究課題に当たられ、ますます充実・発展されますことと会員の皆様のご活躍を祈念し、発刊によせる言葉といたします。

発刊に寄せて

士別市教育委員会 教育長 朝 日 保



無数に存在する地名は、古くからの人間生活の痕跡であり、その地方の歴史を知り、地理を語る貴重な実在資料です。この地方に残る地名のほとんどを占めるアイヌ語を語源とするものも、地形や場所の状態を表

すものが多く、アイヌモシリ（大地）のうえで昔から、自然の知恵を学び、恵みを享受し、素朴な生活をしながら、自然とともに生きてきたアイヌ民族の生活文化を説明する大切な文化遺産であります。

安政4年、松浦武四郎は天塩川筋を調査、探検し、アイヌの人達が語り継いできた、当時の地名を「丁巳天之穂日誌」「川々取調帳」などの文献に詳細に書き残しました。

しかし、アイヌ語には文字がないため、明治以降、アイヌ語の発音に、意味に関係なく単に漢字の音を借りて表現する日本流の地名へと変化し、さらに、屯田兵入植以来の急激な開発は、土地利用と地形に大きな変貌をもたらしました。

この歴史の流れの中で、多くの地名が風化し消え去り、本来の意味が失われていきましたが、この度、中多寄小学校、尾崎功校長の永年にわたる調査、研究により見事に復活することとなりました。

先生は、上士別中学校勤務の時代も加え、武四郎の資料や幕末、明治以来の古地図などを詳細に分析、現地をつぶさに歩き、地形を実検し、文献に残された一つ一つの地名を現在に甦らせました。

この書は、自然を大切にし、自然との共生を図りながら生ることを改めて求められている私たちにとって、大きな指針となるものであります。

尾崎先生のご努力と、士別市開拓100年の記念すべき年に、発刊を実現された士別市郷土研究会のご尽力に心から敬意を表します。

目 次

発刊のことば

1、はじめに	1～2
2、アイヌ語河川名図	3
3、現在の河川名図	4
4、天塩川筋（風連～多寄～下士別）	5～13
5、天塩川筋（下士別～九十九湾曲部～中士別）	14～23
6、天塩川筋（中士別～上士別～朝日）	24～33
7、剣淵川筋（士別～剣淵～和寒）	34～42
8、剣淵川筋（和寒～蘭留）	43～45
9、犬牛別川筋（西士別～温根別）	46～49
10、二十万分の一図「名寄」（道庁地理課）	50
11、参考文献	51
12、地名索引	52～54
13、あとがき	

は　じ　め　に

士別市は1999年（平成11年）7月1日、開拓100周年の節目を迎える。明治32年7月1日、屯田兵は陸路刈分け道を歩いて、その家族は剣淵村ビバガラウシから舟に乗って、士別へと上陸した。

「士別市史」には、屯田兵上陸の様子が次のように記されている。『7月1日早朝同じような無蓋車に乗せられて旭川を出発、すでに現役を終った永山屯田兵村を左右に見ながら汽車は蘭留に着いた。……塩狩峠のはげしい坂は線路がしかれて間もないため振動がはげしく、機関車には炭水車と台車だけ連結してようやく国境の坂をこえて和寒に到着した。これより先は建設列車もなく、下車して徒歩でただ一筋の刈分け道を家族とともに士別に向かった。はじめて見んとするわが村、そうしてこれから一生を送る士別村への歴史的な第一歩を踏み出したのである。……泥炭土の荒道は連日の晴天にかわいて土煙りを立て、盛り上ったゴムまりのように浮動する仮定県道を歩いて、ようやく剣淵村ビバガラウシ福井橋のたもとにたどりついた。

これより士別までは道路が開かれていないので老幼婦女子はここで菓子をもらい、看護兵がつき丸木舟数隻に分乗して剣淵川を下り、旧観月橋のたもとに上陸、感激の第一歩を踏みしめたのである。……一方壮健な者は剣淵村屯田兵第3大隊本部前を経て、陸路刈分け道の樹林をぬって士別に入った。ときに明治32年7月1日のことである。』

以来100年間、我が郷土は大きな発展を遂げて今日に至るが、そこには先人達の筆舌に尽くし難い苦勞があったことを決して忘れてはならない。

士別市郷土研究会はこの節目の年に当たり、また当研究会創立40周年を記念して開拓以前の士別地方に思いをはせると共に、当時の様子を後世に語り継ぎ、いつまでも美しい郷土であってほしいとの願いを込めて本書を発刊するものである。

開拓以前の士別地方、それはうっそうとした原生林に覆われ、天塩川が我が物顔に蛇行し、その川筋ではアイヌの人たちが漁労・採集生活を送るという時代であった。

この地に初めて和人が足を踏み入れたのは、今から200年前のことである。その後、近藤重蔵、松浦武四郎、佐藤正克、興津寅亮らが探検し、その文献から当時の様子が偲ばれる。中でも松浦武四郎は140年前の安政四年旧暦6月に天塩川河口から上流へと遡り、詳細な記録を残している。今日の地名のほとんどが、武四郎が記録したアイヌ語が母体になっていることは周知の通りである。

そこで当研究会としても、士別地方（士別市と風連町・朝日町・剣淵町・和寒町）に、アイヌ語地名がどのくらいあるのかを調査してみた。その結果、110ものアイヌ語地名が見つかった。そのうちワツカウエンナイ川のようにアイヌ語のまま残っているか、元のアイヌ語が確認できるものが72、風化して地名として残っていないものが38あることが分った。そして110のアイヌ語地名について、古い地形図を頼りに地名の由来や当時の自然環境を考察して、開拓以前の士別地方の再現を図ってみたのが本書である。

本書の記述は次のようになっている。

①現在の河川名は、北海道土木協会編『北海道河川一覧』（1984年）

アイヌ語地名⇒現在名 によった。

②現在名のないものは、地名として残っていないものである。

【近藤川筋図】 近藤重蔵の「天塩川川筋図」。1807年（文化四年）の探検の際に記録された。川下より川上にむかって略図的な川が描かれ、その図中に川の流路方向を干支方位で、上下に地名、流入川名、山などの注釈を記入している。中州や流入する支流、川岸の崖や大岩などもほんの略図程度であるが描かれている。東京大学出版会編『大日本近世史料』（1989年）に所収されている。

【天之穂日誌】 1857年（安政四年）、松浦武四郎の踏査記録「丁巳 天之穂日誌」。近藤重蔵より50年後のことである。日誌には、アイヌ語地名やその由来、川岸の自然などがくわしく記録されている。またアイヌの人たちとの交流を通して、アイヌ民族への理解を深めている。北海道出版企画センター編『丁巳東西蝦夷山川地理取調日誌』（1982年）として出版されている。

【松浦取調図】 松浦武四郎の「川々取調帳」。武四郎が東西蝦夷山川地理取調御用の途次に、大中河川について聞き書きした手控（野帳～フィールドノート）であろうと認められる。武四郎の書き留めた地名が、明治5万図にそっくりそのまま使用されているのは、大変興味深いことである。北海道出版企画センター編『武四郎蝦夷地紀行』（1988年）に武四郎直筆の川筋図と河川名が掲載されている。

【關幽日記】 佐藤正克が1872年（明治5年）に探検・踏査した時の記録。松浦武四郎より15年後のことである。正克は上川・中川の二郡を探検し、剣淵川上流から石狩川へぬけようとしたが失敗に終る。その行程には諸説があるが、本書では日記を熟読し、地形図を詳細に検討することで一つの結論に達することができた。高倉新一郎編『日本庶民生活史料集成』第4巻（1969年）として出版されている。

【永田地名解】 永田方正著『北海道蝦夷語地名解』。明治24年（1891年）の初版発行であるから「關幽日記」より20年後のことである。アイヌ語地名研究のバイブル的存在。士別地方のアイヌ語は20ほど集録されている。昭和47年に復刻版が国書刊行会から発行された。

文献に記載されている地名や記述は原文をそのまま載せた。一つのアイヌ語であっても、文献によって読み方や書き方が異なり、歴史の重みと奥行きを感じさせる。

アイヌ語河川名

アイヌ語のまま残っているか 元のアイヌ語が確認できるもの



現在の河川名 北海道土木協会編「北海道河川一覧」による



フーレペツ ⇒ 風連・風連別川

【近藤川筋図】 フウレップ『此川上ナヨロ邊迄往ヨシ』

【天之穂日誌】 フウレプ『フウレベツの訛りなり』

【松浦取調図】 フレプ

【關幽日記】 フウレベツ

【永田地名解】 フウレペト° 『赤川』

フーレ（赤い）ペツ（川）という意味で、水に酸化鉄が含まれていて、水は別に赤いわけではないが、川底や両岸が赤くさびたような川で、北海道の泥炭地の中を流れる川に多い。



タヨロマ川

タヨロマペツ ⇒ 多寄・タヨロマ川

【近藤川筋図】 ナイタイベ

【天之穂日誌】 タヨロマ

【松浦取調図】 タヨロマ

【關幽日記】 タヨロマ『「タヨロマ」ヲ過グル頃日漸ク没ス』

【永田地名解】 タヨロマペツ『林川「タイオロオマペツ」ノ急言、林中ニアル川ノ意』

タイ・オロ・オマ・プは林の端にある者の意で、林のはしにある川ということ。この地名によって、この辺りは密林で覆われ、森深い中を川が流れていたことが分かる。

マッカリペツ ⇒ 真狩川

更科源蔵氏の「アイヌ語地名解」によると、マッカリは後をまわる意で、天塩川から見て丘陵のうしろを流れている川であるとしている。

ハッチャシナイ ⇒ 初茶志内川・山

【近藤川筋図】 ハシタアシ『近崖絶壁』

【天之穂日誌】 マツシヤシ『右の方、
峨々たる丸山一ツ有』

【松浦取調図】 マツシヤシ

【關幽日記】 ハチヤシ

現在は“弥生”という名になっている。ハツは山ブドウのこと、チャは採ることで、ナイは沢。この辺りは山ブドウが多く、秋にそれを採りに出かけた沢だった。



ぶどう・こくわ採り（「アイヌ風俗絵巻」より）

エペウンナイ ⇒ エペウンナイ川

【天之穂日誌】 ユウベウンヌ『此処までむかし
潜竜沙魚（ちょうざめ）上りし
事有と云よし』

【松浦取調図】 ユウベウンヌ

ユベはちょうざめのことで、ちょうざめが入る川の意。ユベが訛ってエペになったと思われるが、更科源蔵氏は食糧（植物性）の豊かな川の意、としている。また、風連ふるさとかほれ話集「赤い川」によると、“イベウイエナイ”（食うあざみの沢）と訳している。



エペウンナイ川

天塩川には古くちょうざめがいたことは知られている。開基五十周年記念誌「士別町史」の開拓余録によると、大正7年頃夜遅く士別市街寄りの剣淵川において、水面がボーツと鈍く光っていたので、猟師が水面をねらって発砲した。暫くの間波立っていた川面が次第におさまるとともに、いつかその不思議な光の物も消えてしまっていた。

その後、名寄付近の魚網に長さ一間半程もあるちょうざめが死んでかかり、後刻鉄砲で撃たれたものであることが分かった。光ったと思われたものは、そのサメの背中に寄生した蛍光虫が光ったものとわかり、不可解だった問題にも一応ピリオドが打たれた。

トイピラ

【天之穂日誌】 トイピラ『右の方山の下崩岸に
成居るなり』

【松浦取調図】 トイピラ

現在この地名は残っていない。エペウンナイ川の上流にあった西岸のトイ（土）ピラ（崖）だったと考えられる。河川の直線化工事によりなくなってしまった。



クアマウシュナイ ⇒ クマウシュナイ川

西風連24線付近、道路の辺りが土崖になっていて天塩川がその下を流れていた

【近藤川筋図】 ボロフシコベツ

【天之穂日誌】 クワ、ウシナイ『此辺に到りて河流いよ、屈曲する也』

【松浦取調図】 クアマウシナイ

【闘幽日記】 クワツマナイ『乃チ「マリプ」（もり）ヲ用テ魚ヲ攫シ以テ餉ス、餉後微雪アリ。』

ク・アマ・ウシュ・ナイで「弓を・置く・たくさん・沢」の意。熊をとるためのアマッポ（仕掛け弓）がたくさん置かれていたところ。しかし、クマ・ウシュ・ナイだと「魚棚・多い・川」となる。

また、風連ふるさとかほれ話集「赤い川」によると、熊牛内“クマウシナイ”（棒沢）と訳している。いずれかはっきりしないが、「松浦取調図」はクウアマウシナイとなっており、最初の解を採りたい。

トープトナイ ⇒ トーフトナイ川
⇒ ポントーフトナイ川

【近藤川筋図】 ツ° ヲプトナイ

【天之穂日誌】 トツフトンナイ

【松浦取調図】 トツプトンナイ

【關幽日記】 トブツンナキ

トー（沼）・プト（川口）で沼口の川の意。明治5万図によると、この辺り一帯は沼のような湿地帯であった。ポントーフトナイ川はポン（小さい）トーフトナイ川の意。



トウフトナイ川

パイタウシナイ

【天之穂日誌】 ファイタウシナイ『ファイといへる喰草多し、よって号なり』

【松浦取調図】 パイタウシナイ

パイとはエゾノリュウキンカ（やちぶき）のこと。パイ・タ・ウシ・ナイはやちぶきをいつも掘る沢の意。明治5万図から判断して、この川は日向スキー場の辺りを流れていたと推定される。現在、ヒュッテの横にそれと思しき川の名残がある。「天之穂日誌」には『此处また大なる野太（ノタップ）に成る処を廻りて』とあり、三十線辺りで東に大きく湾曲していたことが分かる。現在この古川は、“白鳥の宿”として地域住民から親しまれている。



エゾノリュウキンカ（やちぶき）

当地は明治27年10月の興津寅亮・調査宿営地である。なお、「北海道地質報文」（明治24年道庁発行、神保小虎著）には、『天塩国ニハ善キ湧泉無ク、唯「アベシナイ」下流チワチワキ（川口ヨリー里）「ウエンベツルベシベ」（ウエンベツ支流）テシオ川本流「パイタウシナイ」（「ナイプト」ヨリ凡ソ六里上ミ）其の他チクベツ川筋（熱泉）等ニ多少ノ湧泉アレドモ大抵皆流出量少ク、多少ノ硫黄分ヲ含有スレドモ一々記スルノ価ナシ。』と書かれているが、このパイタウシナイの湧泉こそ明治の末期に田口善次郎が温泉場を始めた現日向温泉の前身である。

天塩川の蛇行と白鳥の宿

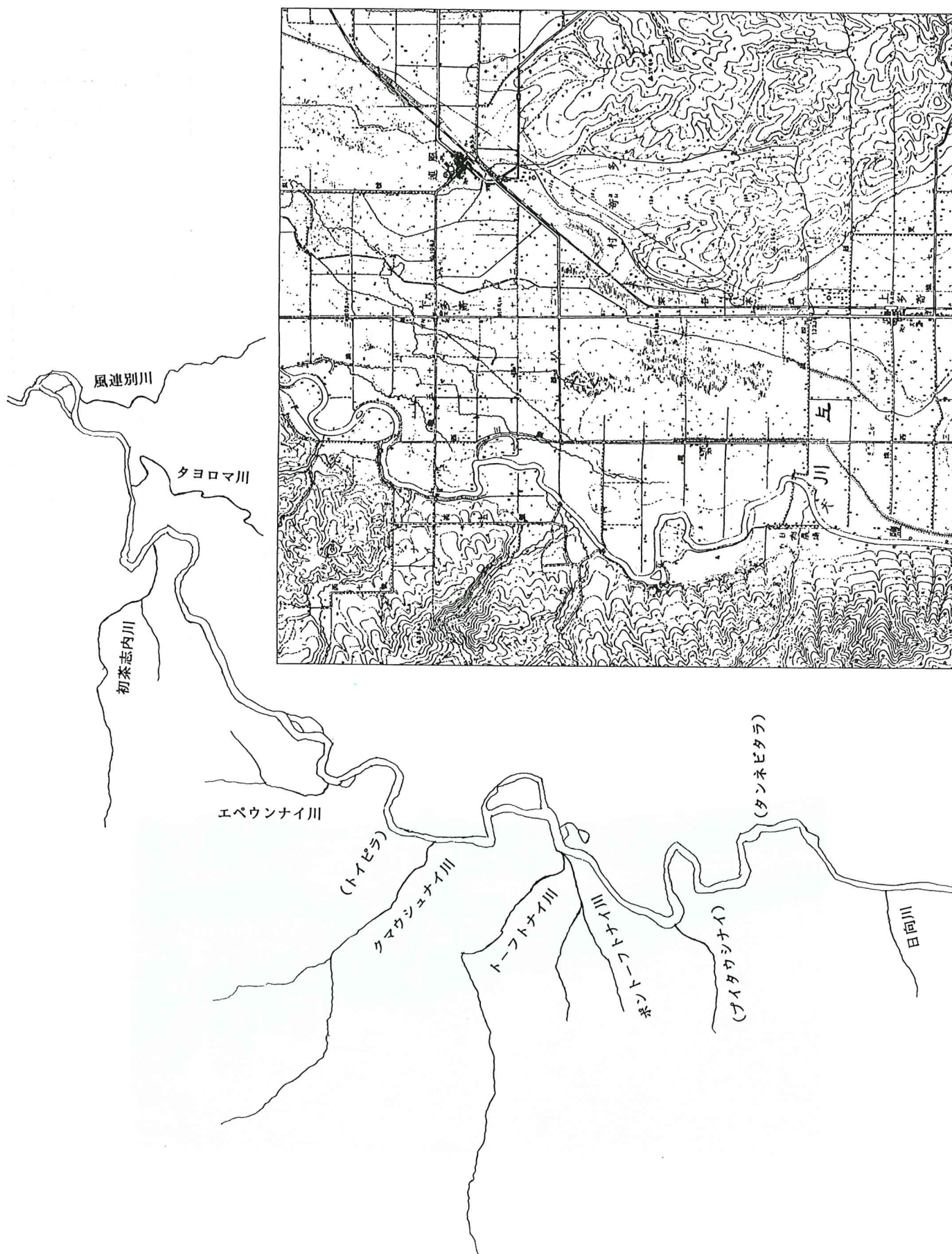
明治31年測図	大正11年測図	昭和27年測図	昭和45年測図	平成8年測図
松浦武四郎が探検した頃は、この様に大きく蛇行して流れていた。測量図に表わされた最古の姿。	二つの湾曲部の形がやや変る。日向農場には34線から渡船で行った。	31線の湾曲部がなくなり、全体の形が変る。35線には吊橋が架けられている。	湾曲部はショートカットされて完全に切り離され、古川となる。日向地区とはやっと橋でつながる。	古川は道路整備によっていくつかの沼に分かれる。その沼に白鳥が訪れ「白鳥の宿」として親しまれている。
— 30線 — — 31線 — — 32線 — — 33線 — — 34線 — — 35線 —				

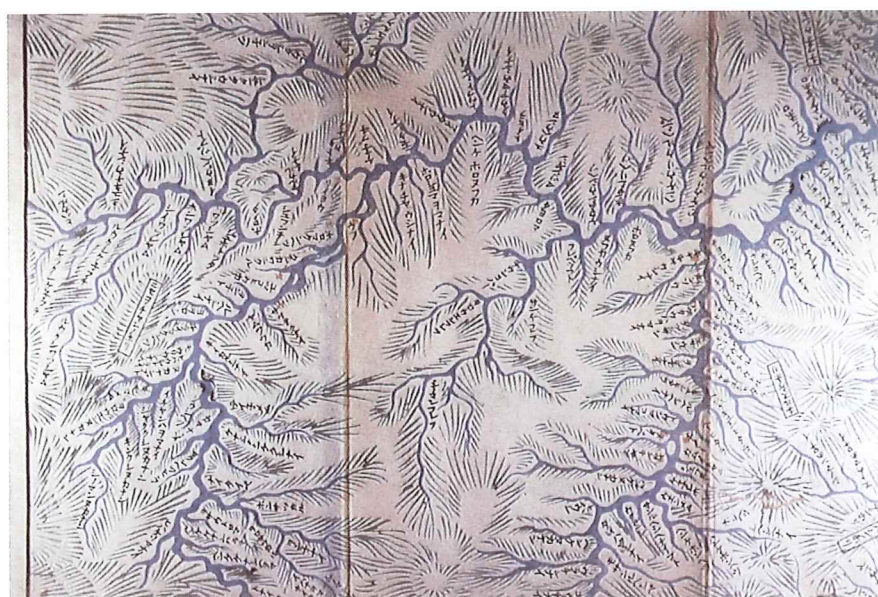
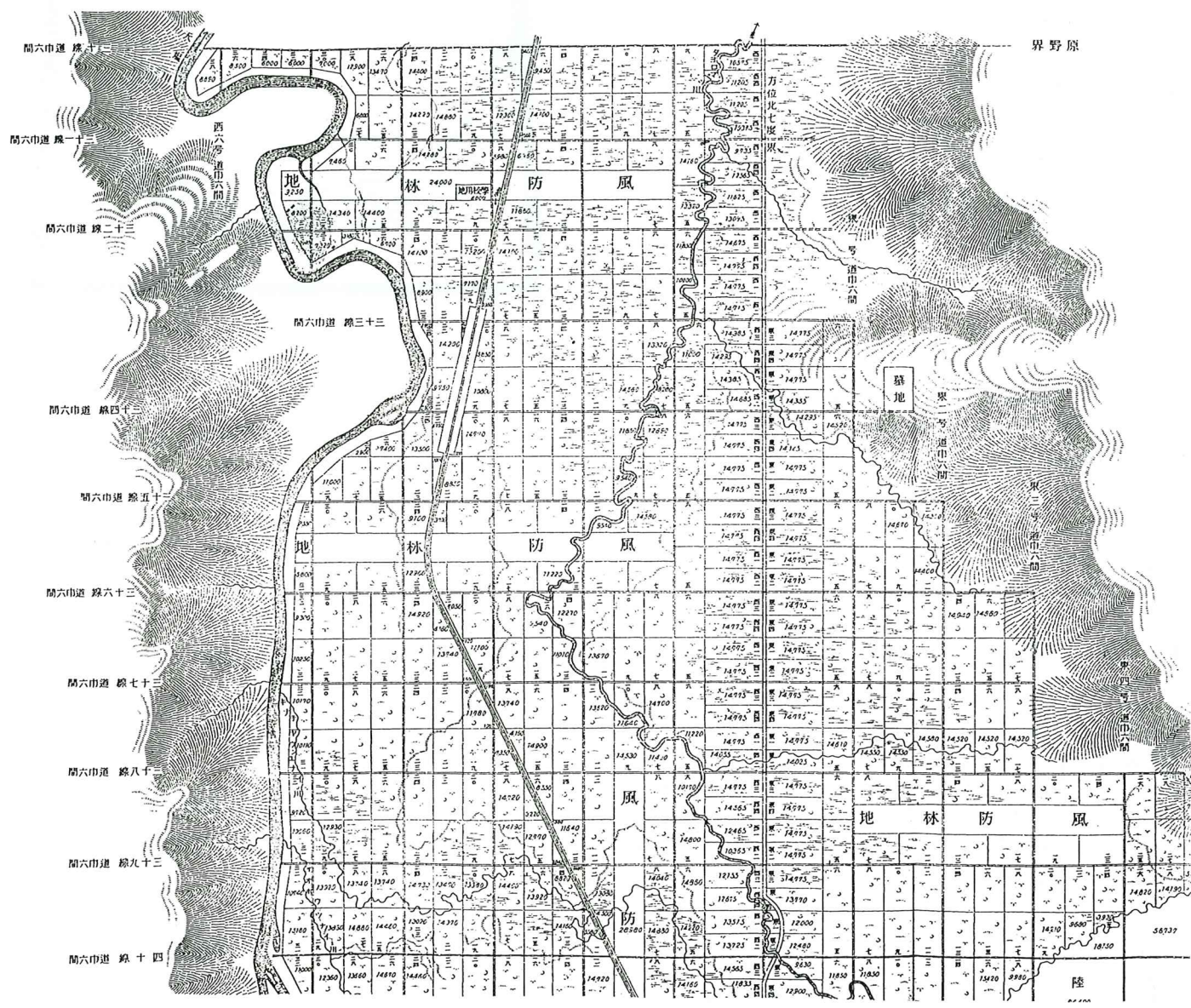


日向「白鳥の宿」(多寄町31線)

風連～多寄

大正11年測量・陸地測量部発行 「5万分の1・士別」を縮小





東西蝦夷山川地理取調図

松浦武四郎

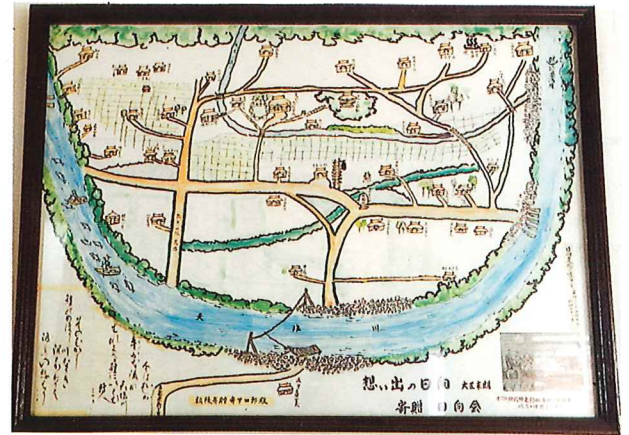
タンネビタラ

【近藤川筋図】 ポンタン子ビタラ、
アシユシキビイタラ、ニヨヒタラ

【關幽日記】 タンネビタラ

「近藤川筋図」によると、現在の多寄町日向地区には、西岸に「アシユシキビイタラ」「ニヨヒタラ」、東岸に「ポンタン子ビタラ」という「ピタラ」のつく地名が三ヶ所見られる。これは磧（かわら）の意味で、この辺りの水際は小石の重なった河原であった。

特に、多寄三十二線・三十四線の河原は大正の末期まで、鮭の好漁場であった。「關幽日記」によれば、天塩川と剣淵川の合流点からここまでの水路を「タンネスツ」（長い麓）と呼び、日向の山並みの裾野を天塩川が直流していたことが分かる。



思い出の日向（日向会より）

ニセイクシュナイ ⇒ 日向川

【天之穂日誌】 ニセウクシナイ『此小川しばし上りて、兩岸峨々たる岩山のよし也。此山の後ろはウリウの源に当たるとかや』

【松浦取調図】 ニセクシナイ

【關幽日記】 ニセヲクスナイ

西の山から日向地区に出ている小川。ニセイは峡谷、クシュは通る、ナイは川で、峡谷を通る川の意。現在、林道が温根別の方に通じているが、昔も山越えの道がついていた。明治5万図のこの川の位置は南の方へ寄り過ぎている。

プトピンニウシュナイ ⇒ 上向川

多寄駅の対岸から天塩川に入る小川。プト（川口）・ピンニ（やちだも）から、川口にやちだもが沢山ある川の意。やちだもの木で舟を作ると、豊漁に恵まれたという。

キナチャウシュナイ ⇒ 新タヨロマ川

【天之穂日誌】 キナチャウシナイ

【松浦取調図】 キナチャウシナイ

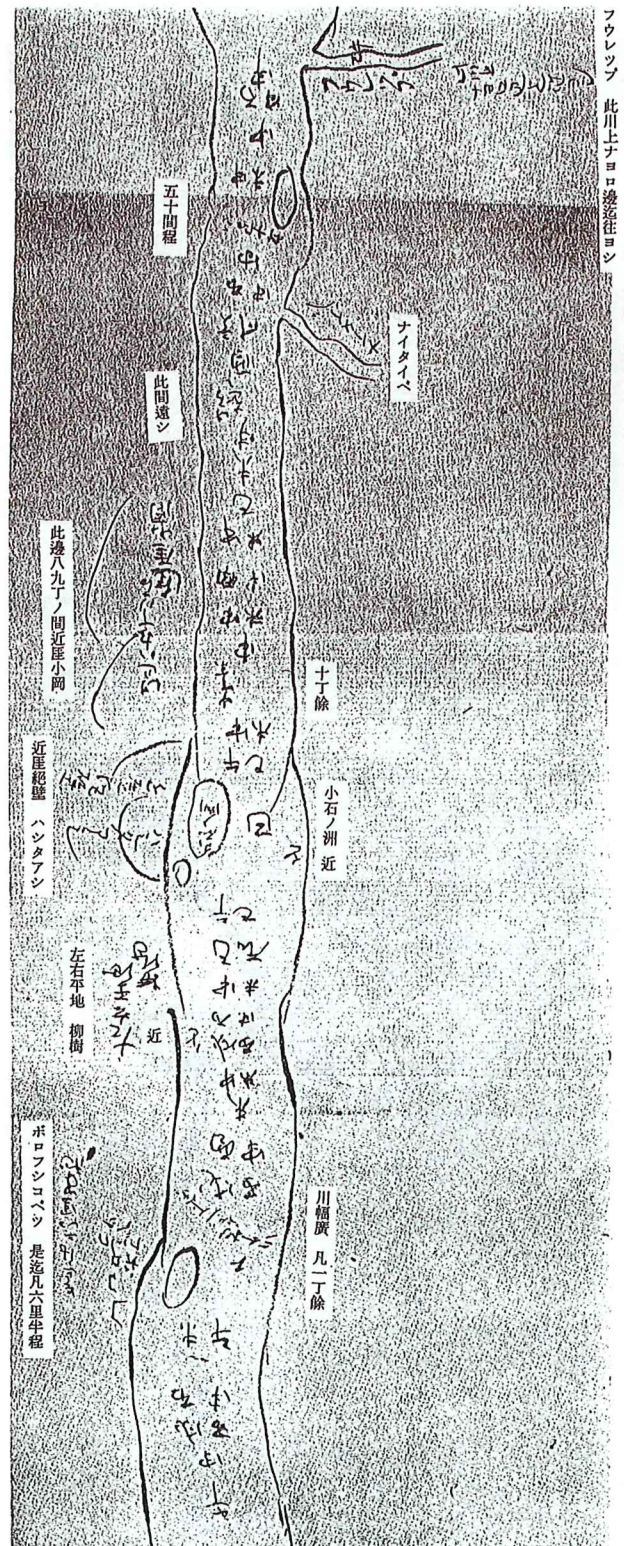
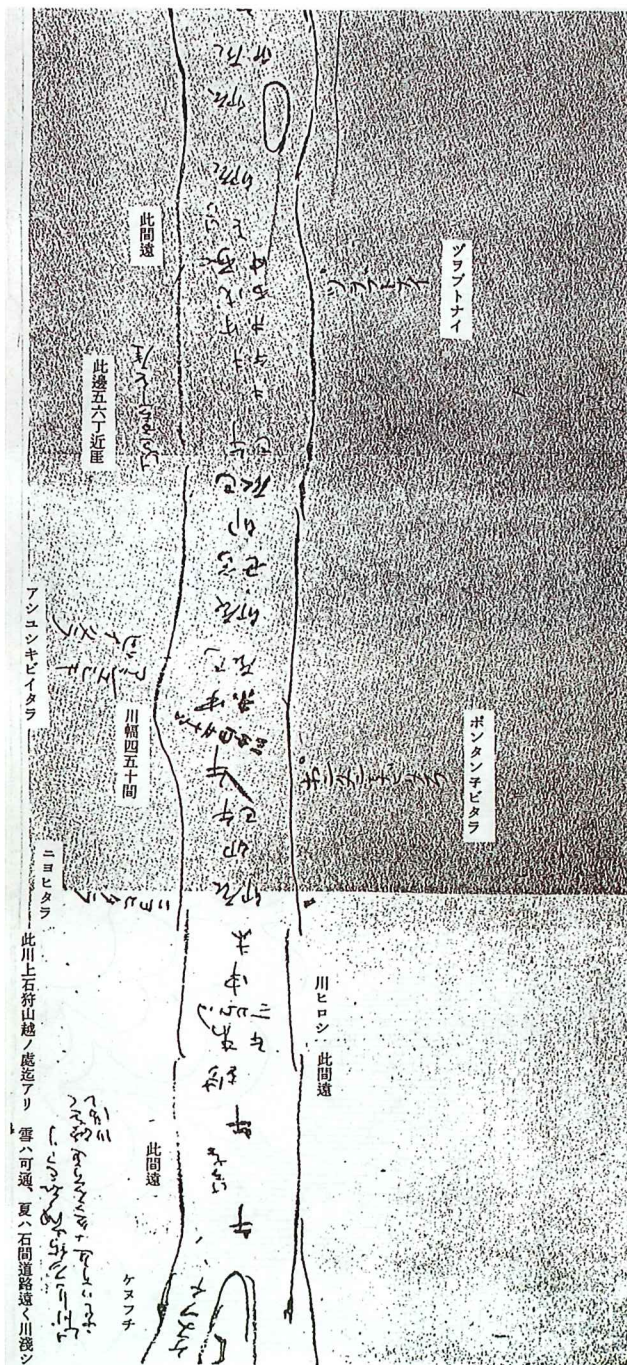
【關幽日記】 キナケヤヲフシナイ

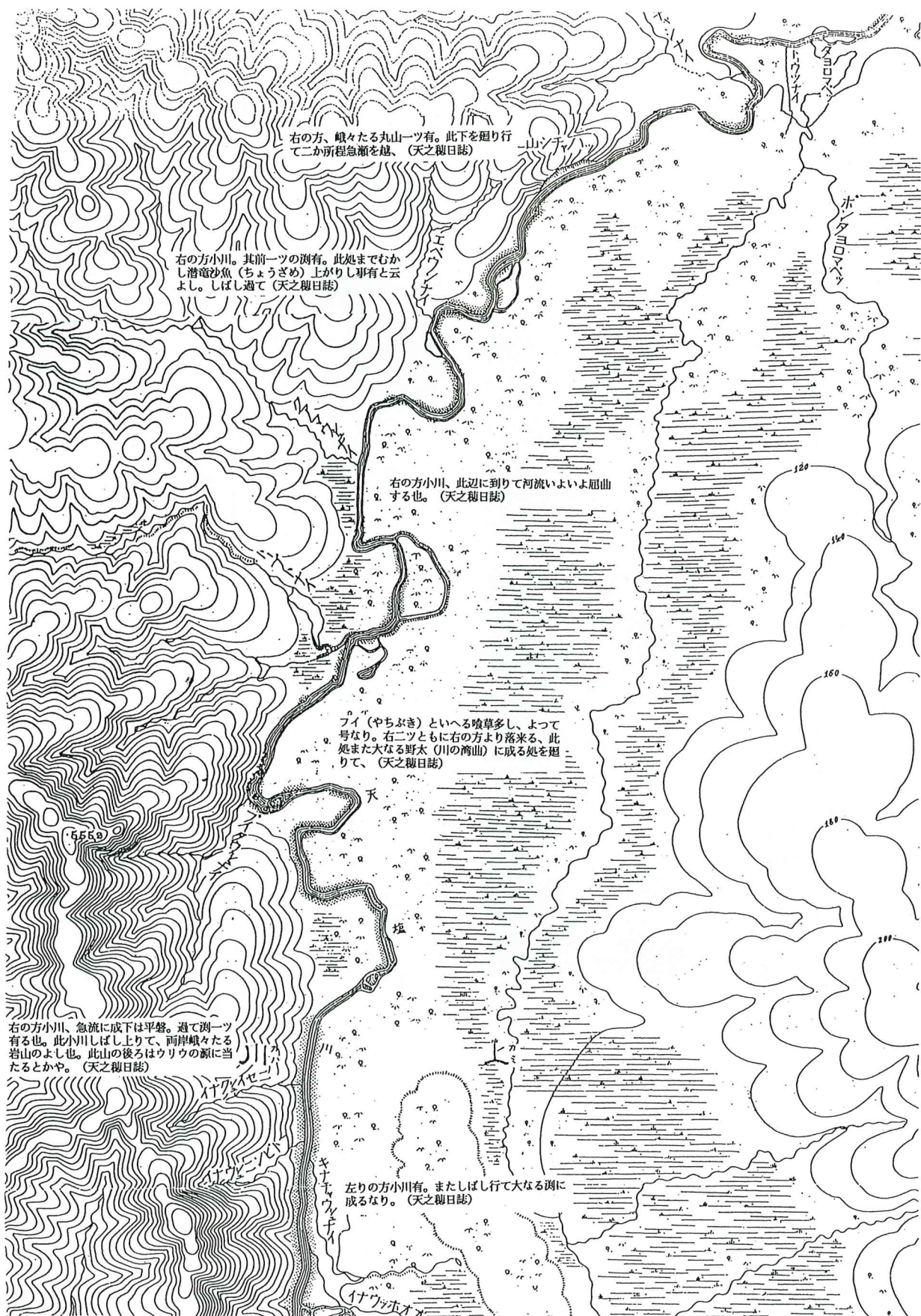
現在の新タヨロマ川辺りの湿地帯を流れていた小川。蒲をいつも刈る川の意。現在は水田になりその姿はないが、昔は沼地で蒲が群生していた。

キナとは草をいうが、なかでも蒲はゴザの素材として最も評価が高く、シキナ（真の草）と呼ばれていた。

近藤重蔵「天塩川川筋図」 風連～剣淵川合流点

『大日本近世史料』（東京大学出版会）に加筆





オオホウツナイ ⇒ オーツナイ川

【關幽日記】 ホーウツナイ

キナチャウシュナイと並んで東から天塩川にそそいでいた小川。オオホは水の深いこと。ウツは肋骨のことで、肋骨が脊椎に直角に着いているように、本流に直角にそそぐ川をウツナイといった。現在のオーツナイ川は武徳方面から下士別を流れ、新タヨロマ川に合流している。



ヘタヌ

蒲

【天之穂日誌】ヘタヌ『此处二股、右の方ケ子フチと云。左り本川シヘツ通り。少しケ子フチの方小さし』

天塩川と剣淵川の合流点をヘタヌといった。「永田地名解」ではペタヌは「川の枝」を意味する。右の川が剣淵川、左の川がシーベツ（親川・天塩川本流）である。

佐藤正克は「關幽日記」の中で、『左方ニ「シベツ」河アリ「ポンテシヲ」ニ發源シ、東南ヨリ来リ此ニ至テ天鹽川ニ合ス。「シベツ」トハ蓋シ幹流ノ謂也。』と述べている。士別の語源は、シーベツから転化したといわれる。

ウツ

【天之穂日誌】ウツ『ウツは汐の早きと云事也。此处急流、……………此ウツの前は小石川にて鮭・鱒・ヤマメ・チライも卵を置処なるが故に、漁業の勝手能き故に土人等もむかしより多く住せしとかや。』

【松浦取調図】ウツ

【永田地名解】ウツナイ『脇川 高橋圖「ワツナイ」ニ作ル』

明治5万図を見ると、合流点より2kmほど上流の辺りは本・支流が入り組んでいて、たくさんの枝川が人間の肋骨のように本流にそそいでいたところであり、一帯は小石河原であった。

近藤重蔵も川筋図に『左右皆平地、柳原・タモキ 漸々川狭、瀬浅 小石河原也 所々鮭子をスル跡アリ』と記している。古川や石河原という語句も見られる。

このような状況から判断して、ウツは一つの独立した川ではなく、枝分かれした支流であったと思われる。おおよその位置は、多寄の西三号道路が天塩川と交わる所で、現在橋脚工事が進められている辺りと推定される。

「天之穂日誌」では、ここにマウカイ・エヘトレン婆・サカイの三軒十二人が住んでいたとされる。その中で武四郎は、チュヒリカというアイヌの女性が病にかかり貧しい生活をしているのに、エヘトレン婆と身寄りのない男やもめの看病をしている姿を見て、その行く末を心配している。エヘトレン婆には働き者の息子がいたが、強制的に「浜雇い」に送られ、今はチュヒリカと共にトレップ（おおうばゆ

り) やパイ (やちぶき) を掘って徐々に生きのびている、と記されている。

トレップはユリ科の多年草で、根の鱗茎に蓄えられた澱粉を食料とした。

マクンヘツ

【天之穂日誌】 マクンヘツ『小石川しばし棹さし上るや三丁、マクンヘツ右の方に有。此方に入りて行こと十丁も過て本川に出る。』

【松浦取調図】 ポロマクンベツ

マクンヘツとは山陰にある川の意であるが、本流に対する枝川を意味しており、ウツの少し上流で中島 (ベツモシリ) をはさんで本流と相対している地形が明治5万図から読みとれる。この枝川は1 kmで本流に合流している。

クンカツテツクル

【近藤川筋図】 チプニダイサン

【天之穂日誌】 クンカツテツクル

【松浦取調図】 クンカワニクル

天塩川・剣淵川合流点より4 km上流のこの地は、周囲の低湿地よりは少し高いところにあり、現在JR宗谷線や国道40号線が走っている士別橋付近であると推定される。

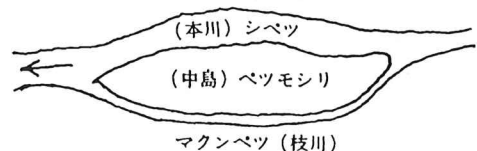
「天塩日誌」には、三軒の夷家 (エットモ家族八人、アヘカヌカ家族四人、トエヒタ家族六人) があると記されている。武四郎はここで、七十才余りの老婆で手が腐ったようになっているのを見る。これは若い頃にサイモンでこのようになったのだという。サイモンというのは、密通とかその他の悪事をしたかどうかを調べるのに、神に誓ってから熱湯の中に入れてある二個の小石を素手で探りとらせる方法で、悪いことをしていなければ火傷しないが、そうでないときは火傷で腐ったようになるという一種の原始裁判である。



おおうばゆり



うばゆりの抜き取り (「アイヌ風俗絵巻」より)



マクンヘツの地形

マクンベツ

【天之穂日誌】マクンベツ

『さてここからは川の流れが幾筋にもなっている上に、流木や倒木が多いので、四苦八苦しながら舟を進める。』（天塩日誌）とあるように、この辺りは枝川が入り組んでいたところである。

ユツコヒウカ

【近藤川筋図】ユツコヒウカ

【天之穂日誌】ユツコヒウカ『昔しより土人等住居多しとかや。然るに今一軒もなし。只丸小屋一軒を見る。』

【松浦取調図】ユツコヒウカ

二つのマクンベツを越えて、ユツコヒウカに至る。位置は、土別神社北側の湾曲部の付け根辺りと推定される。

ピウカとは石河原の意。川岸からちょっと引っこんでいる水溜りで、魚がよく集まるところをいう。「永田地名解」には“立待”とあり、アイヌの人達がそこで魚を待ち伏せにして“もり”で突いて取ったのでそのような名がついたと思われる。

オンネト

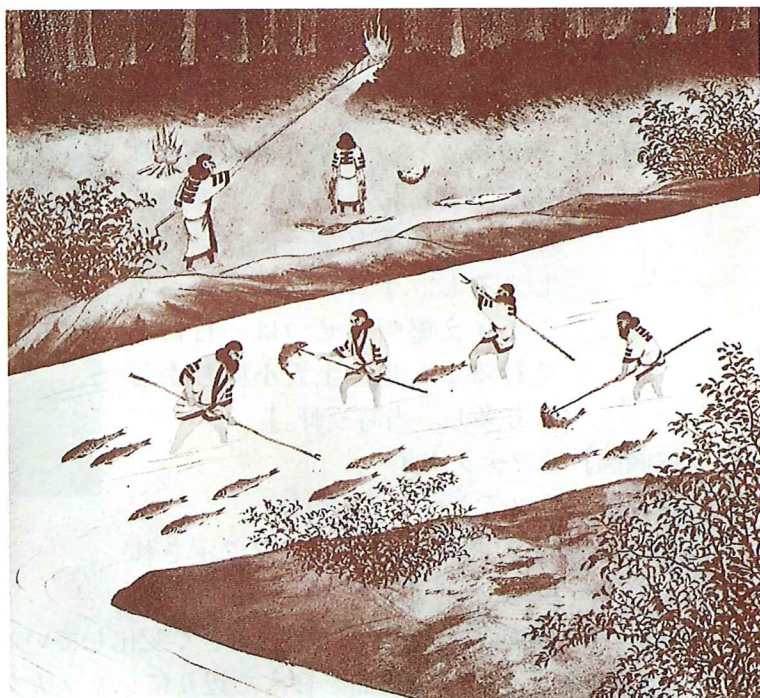
【天之穂日誌】ヨン子ト『急流柳の倒れ木を流した伏木を切等して上り行に、ヨン子ト、右の方相応の川有。此上に小き沼有るとかや、……』

【松浦取調図】ヨン子ト

ヨン子トは年老いた沼の意であるが、その位置は大きく湾曲している九十九山の北岸の辺りと推定される。

1894年（明治27年）9月から10月にかけて天塩川を踏査した興津寅亮の「天塩川沿岸状況調査復命書」には、『十月十六日「プイタウシナイ」（日向）ノ碛ニ宿ス、次ノ日午前七時出発、十一時五十分標津字「オンネトウ」ニ着ス。此行里程往復五里。……』とある。

興津寅亮調査最上流到達点のオンネトウと一致するかは定かではないが、この辺りであったと思われる。



さけ漁（「アイヌ風俗絵巻」より）

サツテクベツ

【近藤川筋図】 シャツチクベツ

【天之穂日誌】 サツテクベツ『左りの岸少し高味有。其傍に小川有。上の処笹原にて、北より東一面に見はらしよろし。ナヨロのキナチヤウシナイえ堅雪のせつは一日に早く行るよし也。土人小屋むかしより多し。当時三軒。』

【松浦取調図】 サツテクナイ

【永田地名解】 サツテクベツ『涸川』

「近藤川筋図」には川の流れが方位で示されているが、ユツコビウカからシャツチクベツにかけては、南々東の方角から東北東へ大きく変化しているのが分かる。これは、九十九山の湾曲部分を示すものである。そして、湾曲を終えた辺りにシャツチクベツ（サツテクベツ）があった。

明治5万図ではワクカウエンナイ・ルベシュペナイ・サツテクベツの三本の川が天塩川に合流している。「天之穂日誌」ではラン子ト・サツテクベツ・ヤムワッカヒラ・ワッカウエンベツの順になっており、サツテクベツがワッカウエンナイ川の上流にあるのか下流にあるのか、意見の分かれるところである。「松浦取調図」では、ラン子ト・サツテクナイ・ヤムワッカ・ルベシナイの順で、ワッカウエンベツが欠落している。

丸山道子氏は、「天塩日誌」の解説の中で『サツテクベツは天塩川が中士別方面から来て、九十九山の裾を大きく北方に湾曲して流れ下士別に向かう、その辺りの南岸ではないだろうか』と下流説をとっている。

筆者は、「明治5万図」や「道庁20万図」さらに「近藤川筋図」にあるように上流説をとりたい。「士別市史」によると、中士別四線の道路に以前“サツテク橋”という橋があったとされる。

いずれにしても、サツテクベツは夏になると水の涸れる天塩川の一支流であったと考えられる。

武四郎は1857年（安政四年）旧暦6月20日に、サツテクベツのルヒサンケの家に宿泊している。当時はアリエテンカ・トセツ・ルヒサンケの三軒10人の部落がここにあったとされる。ほとんど留守であったが、武四郎が来ていると聞き、皆帰ってきて賑やかにもてなしたとある。また帰りにも泊まり、祝宴をしている。

佐藤正克は、明治5年旧暦10月23日、ニシパコロ等6人のアイヌを案内に3隻の丸木舟で天塩川を遡り、ここまで来ている。「闘幽日記」によると、『其水路ヲ「ハクヌツ」（瀬浅と深とろが交互になっている流れ）ト云ヒ、水勢悍迅、之レニ加フルニ日既ニ暮レ操棹意ノ如クナラズ、舟覆没セントスルモノ數々ナリ。難ヲ犯シテ邁進ッシ「ウツカ」ニ至リ、村長「ニシパコロ」ノ家ニ投ジ、行李ヲ解キ家人并ニ舟子ニ酒ヲ與フ。「ニシパコロ」ノ家ハ右岸ノ大樹林中ニ在リ。』とある。

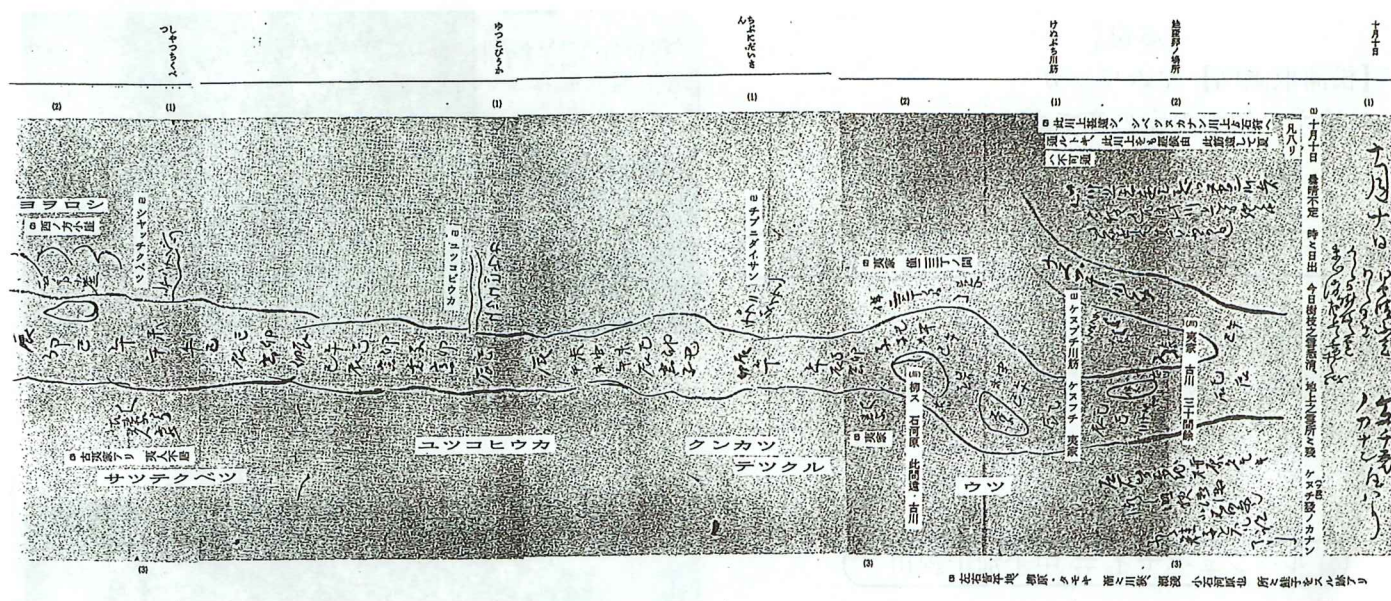
この「ウツカ」こそ、サツテクベツを指しているのではないだろうか。



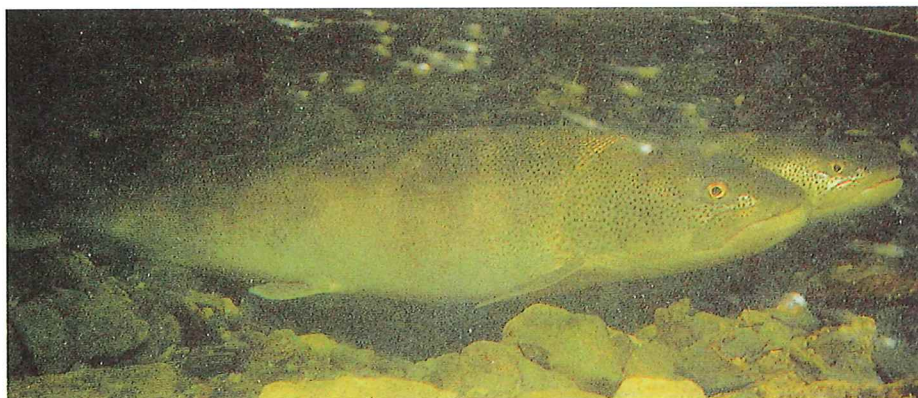
松浦武四郎宿营地（中士別基線）

近藤重蔵「天塩川筋図」剣淵川合流点～九十九湾曲部

『大日本近世史料』（東京大学出版会）に加筆



チョウザメ



いとう

ヤムワッカヒラ

【天之穂日誌】 ヤムワッカヒラ『左りのヒラより涌出す也。実に極々の清冷なる也』

【松浦取調図】 ヤムワッカ
冷たい飲水の崖の意である。

ワッカウエンナイ⇒ワッカウエンナイ川

【天之穂日誌】 ワッカウエンベツ
飲水悪い川の意。九十九山の東に流入している川。

ルベシュペナイ⇒中士別十線川

【松浦取調図】 ルベシナイ
山を越えて行く路のついている沢の意。ワッカウエンナイ川と並んで天塩川にそそいでいた。東方の山間から来る川で、これを入れて行くと内大部の上流を越えて名寄の下川に通じていた。

エオルシ

【天之穂日誌】 ヨヲロシ

【松浦取調図】 ヨヲロシ

「天之穂日誌」には『ワッカウエンベツ、左りの方小川、また此前辺赤磐にて急流なり。』とあり、ワッカウエンナイ川の辺りからヨヲロシ（エオルシ）の赤い岩肌が見えたことになる。さらに、『ヨヲロシ、右の方平也少しの山に成、其下急流大赤磐なり。』とあり、山の岩崖が水の中から屹立している様子が分かる。エオルシは九十九山の東南端の崖（堰堤の辺り）を指していると思われる。

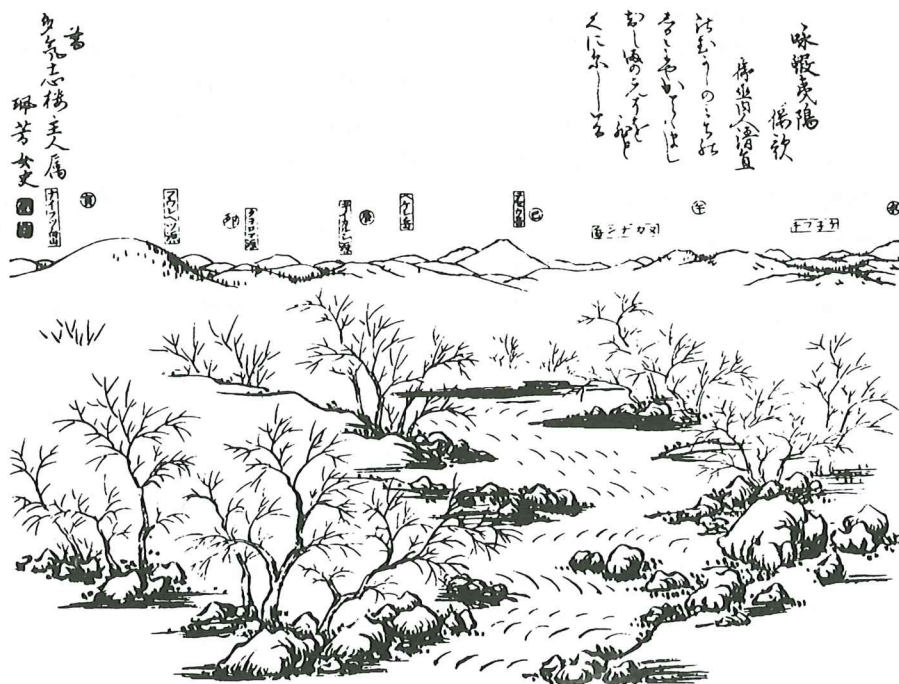
なお、「近藤川筋図」には『西ノ方小崖』と表されている。崖の前面には中州も描かれており、現在の地形と一致している。



ワッカウエンナイ川



九十九山東南の堰堤



ナヨロフト付近よりテシオ岳を望む（「天塩日誌」より）

佐藤正克の「關幽日記」

明治4年8月に天塩地方の支配は、水戸藩から開拓使に引継がれたので、天塩地方は枝幸・宗谷・利尻・礼文とともに、明治5年9月14日に開拓使宗谷支庁の管轄に入った。この宗谷支庁の中主典で、天塩在勤の佐藤正克が、天塩川筋の実情調査を命ぜられた。この命によりシベツの村長ニシパコロに名寄川付近に越冬のため小屋を作らせ、食糧を送り込んだのである。

そして、10月8日、ニシパコロ等6人のアイヌを案内に、3隻の丸木舟で天塩を出発して川を遡り、ナヨロでその冬を越して正月15日、宗谷に帰着するまでの記録を綴ったものが佐藤正克の「關幽日記」である。

この日誌によると天塩から12日かかって10月19日、ナヨロ川岸（注、新生7線）の小屋に到達し、小屋に落ちつくと直ちにシベツに行くための準備をし、ニシパコロ達を連れて同地へ向かった。すでに同地方は積雪一尺余もあった。

22日晴、夙起針32度、行李を埋め「ニシパコロ」「チャサ」等を従へ舟に乗り、流れを遡り「シベツ」に向ふ。未だいくばくならずして朝来、経過せる「ナヨロ」の諸峯を東南に見る。よって舟の西南に進行せるを知るなり。東岸「レタルチルト」に一茅屋あり、かつて紋別の土人仁太郎というものの来住する所という。また溪流あり「フウレベツ」という。「タヨロマ」を過ぐる頃日ようやく没す。すなわち西岸なる茅舎に宿す。村長「ニシパコロ」の所有にして、漁をするものの起臥する所という。蚤多く終夜眠るあたわず。舟中針40度より53度に昇る。此日過る所、兩岸おおむね平原にして林多し。夜、風雨、針57度。

23日陰暁、霧四塞咫尺を弁ぜず。針4度、すでに発す。須臾にして「ケショマ」に至る。西岸は峽巒起伏して、東岸は林野茫々たり。夜来大雨、河水暴漲、流れ急にて灘多し、舟子はなはだ苦しむ。午時、ようやく「クワツマナイ」に至る。すなわちマリプを用ひて魚を攫し、もって餉、後微雪あり。「トブツンナキ」過ぐ。西岸山多し、皆西南に連互せり。未だ其名を詳にせず。また「ケネブツ」に沿ふて山あり。「ポンガアマシナイ」という。又「カマハウノチ」「クミタウツシナイ」あり。皆西岸にあり。此辺急灘多し。これを過ぐれば西岸に「タンネビタラ」「ニセヨクスナイ」あり。東岸に「キナケヤヲフシナイ」あり。此間の水路を「タンネスツ」といふ。さらに進んで「ホーウツナイ」に至る。東岸にあり右方に大河あり「ケネブツ」といふ。けだし源を石狩に発す。故に冬季、石狩に

行くものおほむね、此川に沿ひ、雪を踏みて上るといふ。左方に「シベツ」河あり「ポンテシヲ」に発源し、東南より来たりここに至りて天塩川に合す。「シベツ」とはけだし、幹流のいわれなり。此より「シベツ」に向ひて進む。其水路を「ハクヌツ」といひ水勢悍迅、これに加ふるに日既に暮れ、操棹意の如くならず舟没せんとすること数度なり。難を犯して邁進し「ウツカ」に至り、村長「ニシパコロ」の家に投じ、行李を解き家人ならびに舟子に酒を與ふ。舟中、針32度、夜40度雪ふる。「ニシパコロ」の家は右岸の大樹林中にあり。屋後に陥穽（かんせい）を設く。此夜、兎熊陥り終夜喙々の声を聞く。

24日朝平坦。針31度、此地戸六口十有五。天塩を距る四十五里或いは五十五里といふ。朝餐の後、土人を召し天長賜酒を分與す。なかに天塩の土人あり「トセツ」といふ。曰く今冬此地に滞在すと。午時針34度、晩に樺を束ね火を点ず。なほ内地の松明の如し。これを持し「ニシパコロ」「トセツ」「チャサレ」に従へ括槍を携へ河へ往き獵す。須臾にして鮭三十余尾を獲たり。すなはち持し還り以て下物となし、土人を会し小宴を催す。土人歡喜歌舞酔を尽して罷む。夜雪あり針40度。

25日平明。雪盈尺、針38度、なお「ニシパコロ」の家に留まる。けだし、余此日を以てまさに「ポンテシヲ」を探らんとす。然れども雨雪あるひは帰途を塞がんことを慮り遂に出ず。午時に至り果して風雪あり。ここにおいて策を決し、明暁を以て「ナヨロ」に返らんとす。よって其の準備を命じ、また米麴煙草を出し鮭魚・蒲蓆・獺皮などと交換す。たまたま「タカエリカ」の家に梟を養ふと聞き酒・煙草を以てこれを購入ふ。

26日暁晴、針30度「トセツ」「タカエリカ」に命じ、昨日交易する所の鮭魚の凍乾テビラ等を舟に載して発す。既にして大雪、舟急灘を下る疾矢の如、その「ハチヤシ」を過るや村長「ニシパコロ」かつて置く所の弩を閲するに其の状、既に熊を射るものの如し。然れども熊逸してあらず。晩に「タヨロマ」西岸漁鱒の茅屋に宿す。即ち22日泊せし所なり。（後略）

以上が佐藤中主典の日記で、明治初年の士別の姿を描いたものである。原文紹介のとおり一行は、天塩から12日間かかって10月19日、名寄川岸の小屋に着き、10月23日士別のニシパコロの家に至り、ここに3日間滞在してふたたび名寄の小屋に戻った。その後、越冬の準備にとりかかり、11月28日までに鮭200余尾を冷凍にし、70余尾を塩蔵として一応の準備を終った。

ニセケチャシ

【天之穂日誌】ニセケチャシ『右の方山有。其麓峨々たる岸壁に成り居り、依て号る也』

【松浦取調図】ニセケチャシノポリ

峡谷の砦と訳せるが、松浦武四郎の「東西蝦夷山川地理取調図」を見ると「ニセヲチャシノポリ」となっていて、エオルシからパンケヌカナンにかけての山を表している。ノポリはヌプリ（山）の訛ったもので、東山町の南側に連なる丘陵地を指していると思われる。

チラエマクンベツ

【天之穂日誌】チラエマクンベツ

チライは“いとう”のことで、「いとうのいる山陰の川」と訳せる。ニセケチャシノポリの麓を流れていた枝川と思われる。

モイレウシュナイ ⇒ 川西五線川

【天之穂日誌】モイレウシュナイ

【松浦取調図】モウリウシュナイ

モイレとは流れの遅いこと、流れのいつも遅い川の意。

ピーカルシュナイ

【天之穂日誌】キイカルウシュナイ

【松浦取調図】キイカルウシュナイ

【永田地名解】ピーカルシュナイ『?』

茅刈る川の意、ルベシュペナイと同じように東方の山間から流れ来た川である。

ピパウシュトライ ⇒ カワニシ十一線川

【天之穂日誌】ヒハウシトライ『右の方小川。
山の下大平（ピラ）有』

【松浦取調図】ピパウシトライ

川西町の丘陵地がピラ（崖）のようになっている所。ピパ（川貝）がたくさんいるトライ（水たまり）の意。



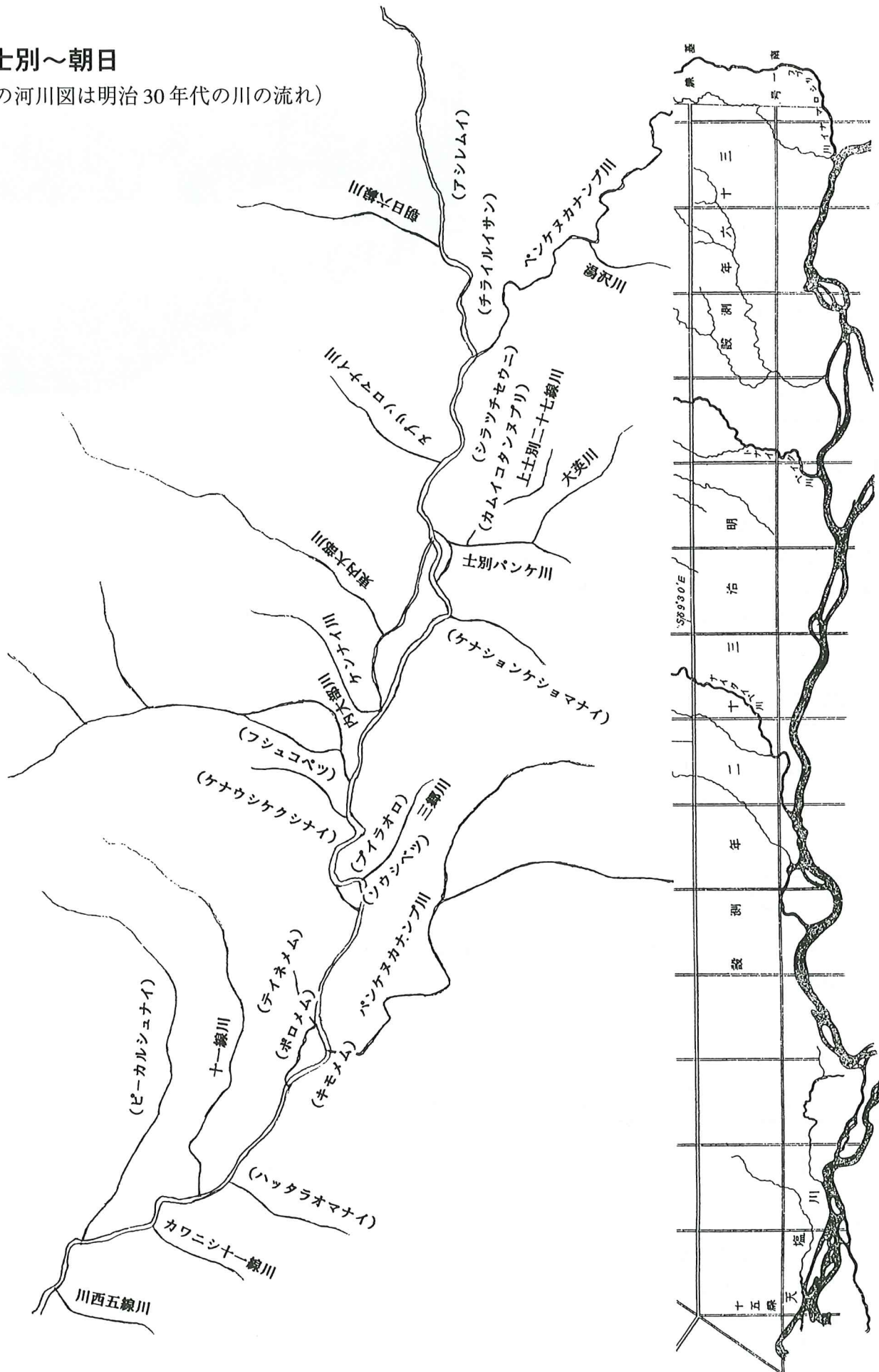
川貝採取（「アイヌ風俗絵巻」より）

『川々取調帳』(国文学研究資料館史料館所蔵)による



中士別～朝日

(右の河川図は明治30年代の川の流れ)



ニタットンクシュナイ ⇒ 十一線川

東岸の小川、ニタツ（湿地、やち）にある川の意。

ハッタラオマナイ

ハッタラは深い淵のこと、淵のところへ出ている川の意。

キモMEM

【松浦取調図】キモMEM

キムン（山にある）MEM（湧水池）の意。「永田地名解」によると、『沼ニシテ清泉湧キ出ル處ヲ「MEM」ト云フ鮭多ク入ル處ナリ』とある。

金川との合流点近くの湧壺で、上士別遺跡のある河岸段丘の下あたりか。「上士別遺跡」（士別市教育委員会編）によると、遺跡の北東約100mには毎分3200ccの湧水があると記されている。

キモMEMとは、上士別市街地寄りにあったポロMEM・テイネMEMに対して名付けられたものである。

ポロMEM

キモMEMの対岸（上士別市街地寄り）にあった湧水池で、ポロは大きいという意味であるが、単に大きいだけではなく、鮭が入るような生活上重要な意味のあった湧壺だったのではないか。

テイネMEM

【天之穂日誌】テイ子MEM『左り小川。此処鮭・鱒多く卵を置く処のよしなり』

【松浦取調図】テイ子MEM

テイネとは、じめじめした湿地のことで、上士別町川北付近にあった湧壺のこと。

パンケヌカナンブ ⇒ 金川・銀川・パンケヌカナンブ川

【近藤川筋図】ノカナン『ノカナンよりベンゲノカナン迄 二日路 右道筋 此より上瀬早く、舟不博取、……』

【天之穂日誌】ハンケヌカナン『右の方相応の川也。此向大赤崩岸平（ピラ）に成たり。其下急流なり。沢目の兩岸は峨々として高山に成たり。……此処二股の少し上、地味高きが故にむかしは土人式軒程有し由なるが、今はなしと。』

【松浦取調図】ヌカナン

【永田地名解】ヌカナンブ『?』



上士別遺跡付近

川下にあるヌカナン川の意であるが、ヌカナンの意味がはっきりしない。ただ「近藤川筋図」には「ノカナン」（鳥の卵を置く所の意）となっており、「士別市史」では『下流の方にある鳥の卵を産む沢』と訳している。ノカナンだとすれば『機弓ノ絲ヲ置ク處』（永田地名解）の意味もある。

「天之穂日誌」にある『二股の少し上、地味高きが故にむかしは土人式軒程有し由』の所は、キモメムのあった河岸段丘上で、上士別遺跡の辺りではないかと推定される。

ソウシベツ

【天之穂日誌】ソウシベツ『右の方小川滝に成て落る也』

【松浦取調図】ソウシベツ

ソーとは滝のことで、滝になって落ちている小川の意、位置不明。

パイラオロ

【近藤川筋図】パイラヤタ

【天之穂日誌】ソウシベツヲマファイラ『赤岩峨々と河中に突出したる之当る汐瀬急なるを号けし也』

『赤岩峨々と河中に突出したる』は三郷の丘陵地が天塩川にせまっている辺りを指す。パイラオロはパイラポロの間違いだろう。パイラとは渦巻の群生する水面（早瀬・激湍）のことで、シュポロ（大瀬）と同義である。

「天之穂日誌」の地名ソウシベツヲマファイラは、ソウシベツ・オマ・パイラで「滝のある激湍」の意。岩が河中に突出している所からは、滝のようになって川がそそいでいたのであろう。

「近藤川筋図」には、ここにパイラウツ[°] ルコタンがあつて、夷家が二軒あつたと記されている。

カネナイ ⇒ 三郷川

【天之穂日誌】カアナイ『右の方小川、少し上大赤平（ピラ）岩、其下は渚也。此処よりもアイヘツえ越るによろしと。……』

【松浦取調図】カアナ、イ

上士別町川北付近に南から入る小川。「永田地名解」によると、カアとは絲とかワナを意味し、『係絲（ワナ）ヲ仕掛ケ置キタル沢』と訳している。パンケヌカナン川が鳥の卵を置く所、あるいは機弓のさわり糸を置く所とすれば、この辺りには鳥が沢山いてワナを仕掛けた所ということになる。

ケナウシケクシナイ

【天之穂日誌】ケナシノシケクシベツ

【松浦取調図】ケナシノシケクシベツ

はんの木原の真中を通っている川のこと。

フシュコペツ

古川の意、内大部川の旧河川の名。

ナイタイベ ⇒ 内大部川

【近藤川筋図】 ナイタイベ『小川 此處ニ泊
夷家二軒 是より上夷不居』

【天之穂日誌】 ナイタイベ『此處まで漸々舟
を持来りけるが、是よりは
中々行難し。よって舟を此處
に置いてキナー一枚ヅ、を背負て
上るに、川すじ大に浅くなり
て歩行やすし。昔間宮も此處まで来りて、是より下りしと云伝ふ。』

【松浦取調図】 ナイタイベ

【永田地名解】 ナイタユベ『川鮫』

更科源蔵氏は「士別市史」に、『永田方正地名解ではナイタユベで川鮫のことであると解いている。天塩川には古く“ちょうざめ”がいたことは知られているが、川鮫という名詞が川の名になることはおかしいし、ナイ・タ・ユベのタの意味も不明である。』と述べている。しかし、明治5万図では「ナイタユベ川」となっている。

いずれにしても、ヌカナンと同様分らない地名の一つである。



松浦武四郎探検の地（上士別町22線）

オンネナイ ⇒ 左の沢川

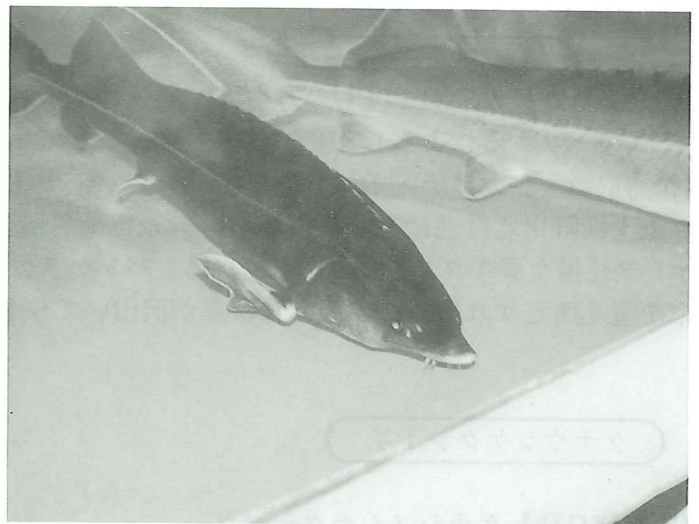
【松浦取調図】 ヲン子ナイ

年老いた川の意で、内大部川に東から入る
支流の名。

イパノマナイタイベ ⇒ 右の沢川

【松浦取調図】 イパナヲマナイタイベ

イパノマはエパシ・オマ（川下に頭向けて
いる）の間違いと思う。この川は西の方（天
塩川の川下）から流れて内大部川に入ってい
るからである。



チョウザメ

ケネナイ ⇒ 兼内・ケンナイ川

本多 貢著「北海道地名漢字解」によると、「ケネ *kene*・ナイ *nai*＝ハンノキの・川」としている。

また「朝日町史」（似峽国民学校長 近江正一氏）によると、ケニネ（赤だも）ナイ（澤）で「赤だも
のある澤」と訳している。

トナイタイベ⇒東内大部川

【天之穂日誌】トナイタイへ『川は赤磐急流、此辺如何にも柳・赤楊横にたをれ居て水を鎖し留めて渚に成る処も有。また瀬と成る処も有る也。……………此処にて丸小屋の古き有るが故に、是にキナを張一宿せんと……………』

【松浦取調図】トナイタイベ

【永田地名解】ト° ナイタユベ『川鮫』

「永田地名解」では内大部と同様「川鮫」としてあるが、はっきりしたことは不明である。内大部の東方にあるため、東内大部と言われて今日に至っている。安政四年旧暦6月21日、松浦武四郎宿营地。

ケナシヨシケシヨマナイ

オサオトルマップの少し下流で天塩川に出ていた小川。ケナシ・ケシ・オマ・ナイで「川原の木原のはずれにある川」の意。

オサオトルマップ⇒士別パンケ川

【天之穂日誌】ヲサウトルマ『右の方中川也。此フト（川口）を越るやまた瀬浅。少し行兩岸いよ、峨々とし、其間の川深く成たる儘、如何とも致し難きが故に、是より戻りけるに、先是より其奥の事を聞て筆記せば、……………』

【松浦取調図】ヲサウトロマ

【永田地名解】オサオト° ルマ『川尻ニ茅アル間ニ在ル川』

現在の大英部落を流れる川の名、オ・サル・ウト° ル・オマ・ブで「川尻葦原の中にある川」の意。もとこの部落名をパンケと呼んでいた。それはこの川をパンケオサオトルオマナイと呼んでいたからである。パンケは川下ということ。「天之穂日誌」に『……………是より戻りけるに』とあるように、武四郎はここまで来て戻ったことになる。すなわち、松浦武四郎天塩川最上流到達地点である。

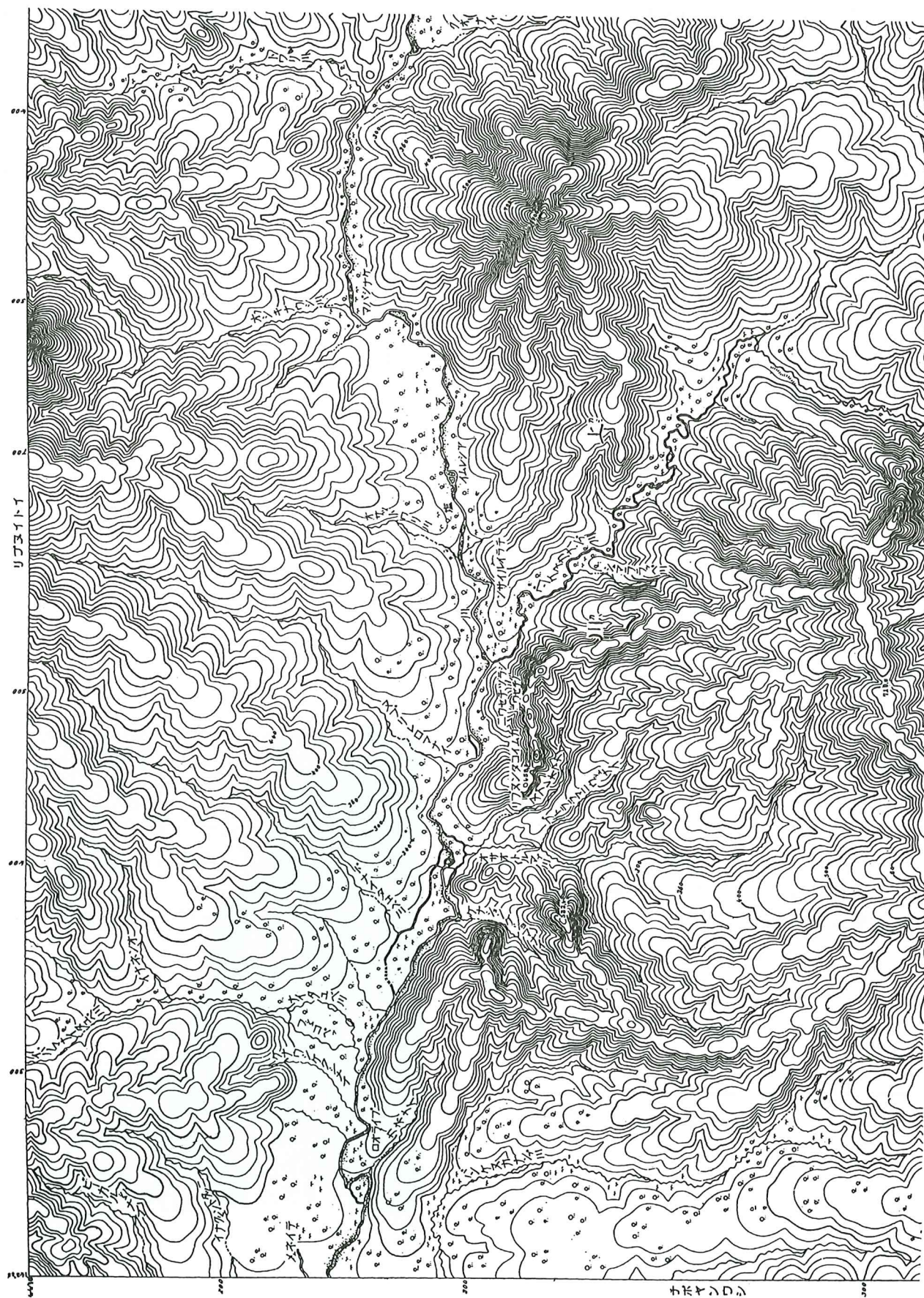
なお、これより先の事は『先是より其奥の事を聞て筆記せば』とあるように、アイヌの人達から聞き取り筆記したことになる。

ヌブレオマナイ ⇒ 上士別二十七線川

オサオトルマップの支流、士別市と朝日町の境をなすカムイコタンヌプリに源を発している。ヌプリ・オマン・ナイで山に行く川の意。



上士別 27 線西側の崖



現在図幅名「岩尾内湖」

プトララマニウシュナイ ⇒ 大英川

オサオトルマップの支流。プト・ラルマニ・ウシ・ナイで「川口に・水松（おんこ）の・たくさんある・川」の意。

ヌプリレロマナイ

⇒ ヌプリソロマナイ川

【天之穂日誌】ヌフリレ、マ

ヌプリ・レル・オマ・ナイで「山の・向う・にある・沢」の意。レとシが間違っ
てシロマナイとなり、さらにソロマナイに
なったと考えられる。

カムイコタンヌプリ

士別市と朝日町の境界、現在石灰を掘り
出している山。カムイコタンは神の部落の
意であるが、この神は多くの場合熊もしく
はおそろしい神を指すので、そのような神
のいる山の意味である。

「士別市史」によると、この山は大正5年
頃“神恵鉦山”という名称で、含銅磁硫鉄
鉦を露天掘りしていたという記録がある。
その後、石灰石採掘へと移行するのである
が、士別パンケ川とペンケヌカナンブ川に
はさまれたこの地域には、相当大きなしか
も品位良好の石灰石鉦床が認められたとあ
る。

「土居原図」でいうと、5の部分がか
ムイコタンヌプリ、2の部分がかのシラツ
チセウニ・ノチセウニとなる。

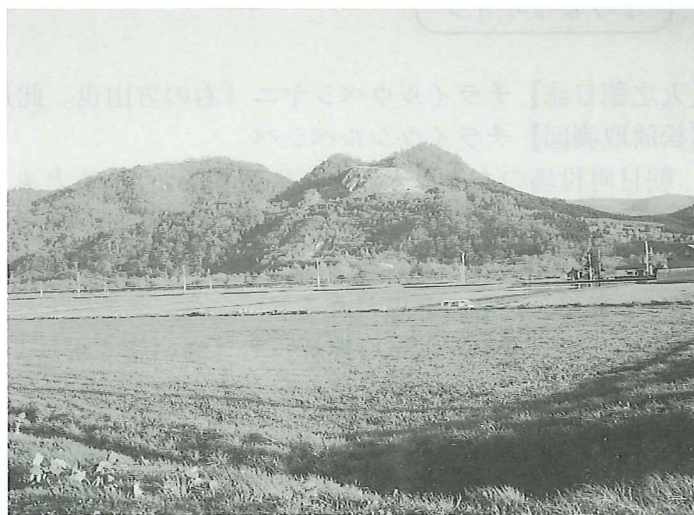
シラツチセウニ・ノチセウニ

【近藤川筋図】ノウチセ『山ノ名』

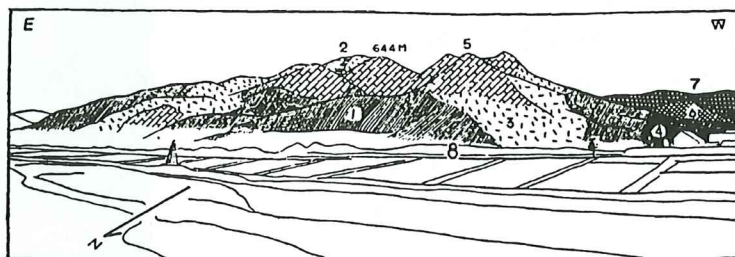
シラツチセとは岩屋のことで多く熊の
入っている岩穴をいい、ウニはある所
という意味で、この辺りにはそうした
熊の穴があったかと思われる。



ヌプリシロマナイ川



石灰山（上士別町 27 線付近）



- 1 黒色粘板岩硬砂岩互層 2 硅質岩 3 輝緑凝灰岩 4 ホルンフェルス
5 石灰岩 6 斑礫岩類 7 安山岩 8 沖積層

27 線より南東方山地を望む（土居原図）

「士別市史」より

ペンケヌカナンブ⇒ペンケヌカナンブ川

【近藤川筋図】 ベンゲノカナン『是迄夷舟可通 凡十一二リ』

【天之穂日誌】 ペンケヌカナン『此源よりも石カリ上川ルベシベツの源えこゆるによろしと』

【松浦取調図】 ペンケヌカナン

【永田地名解】 ペンケヌカナンブ『?』

川上にあるヌカナン川の意であるが、ヌカナンを「鳥の卵を置く所」と訳せば、「上流にある鳥の卵を産む沢」となる。

シュマララッペ ⇒ 湯沢川

ラッペの意味が分からないが、シュマ・ララク・ベツとすれば「石・すべすべして滑る・川」の意。

チライイサン

【天之穂日誌】 チライウベシヤニ『右の方山也。此辺川幅五～六間に成るよしなり』

【松浦取調図】 チライウシルベシベ

朝日町役場のある奥土別市街地辺りをいう。もともとは天塩川の川中の名であったと思われる。チライは“いとう”、ルイサンヤルベシベは下る路で、「いとうが沢山下る所」の意。

「永田地名解」によると、チライは“イト魚”と書かれており、この辺りの地名の「糸魚（いとい）」はこれを意識したものと思われる。

なお、イ（高い）トエ（崩れ）で「高い崖くずれ」という説もある（「朝日町史」似峽国民学校長 近江正一氏）。

オサツトワリ ⇒ 朝日六線川

【天之穂日誌】 ヲサツテウシ

【松浦取調図】 ヲサツテウシ

オサツは川尻の乾きたる川の意である。トワリの意味は不明であるが、テウシとなるとテシカテシウシが訛ったものと考えられる。この川は川底が岩盤で、渇水期になると魚をとるための築（岩石）が立ち並んでいるように見えたのではないか。



いとうの幼魚

アシレムイ

アシリ・モイ（新しい・湾）の訛ったものとも考えられるが、意味不明である。地形的に見て、山谷の中で平地が湾のように入り込んでいる所を指すのではないか。

ケナシパマ⇒ケナシ川

【天之穂日誌】ケナシハラマ

【松浦取調図】ケナシパマブ

「永田地名解」ではケナシ・パ・オマ・ナイで、ケナシは川傍の林を指し“林川”と訳している。

オシキナウシ⇒砲大川

【天之穂日誌】ヲシキナウシ

【松浦取調図】ヲシキナウシナイ

【永田地名解】オシキナウシ『川尻ニ蒲多キ處』

オ・シキナ・ウシで「川口に・蒲が・多い所」の意。

トワリ ⇒ 登和里川

【天之穂日誌】トワリ

【松浦取調図】トワリ

トワリの意味は不明である。ト°ワルの訛ったものと考えれば、水がぬるい川の意である。

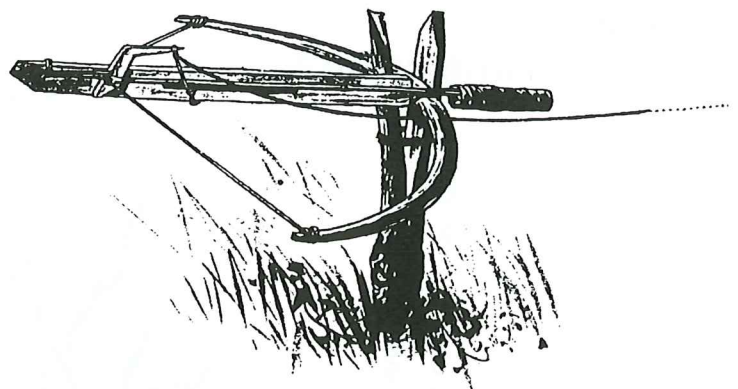
また「朝日町史」（似峽国民学校長 近江正一氏）によると、トモリ（アイヌねぎ）の多い所としている。

オサットワリの元の名がオサツテウシとすれば、トワリ＝テウシとなり、川底が岩盤の川という解も成り立つ。

トワリは美しくよい地名であるが、いずれにしても意味は定かではない。

クオナイ ⇒ 久尾内川

クは仕掛け弓を指す。ク・オ・ナイで、仕掛け弓を置く沢（アマボ沢）の意。この辺りの地名も“久尾内沢”となっている。



イワオナイ ⇒ 岩尾内川

【天之穂日誌】イワヲナイ『此沢に硫黄多しと聞り』

【松浦取調図】イワナイ

【永田地名解】イワオナイ『岩山ノ川』

硫黄の多い川か、岩山の川の意である。

アマックウ（「アイヌ民族誌」より）

ケネブチ ⇒ 剣淵・剣淵川

【近藤川筋図】 ケヌフチ『此川上石狩山越ノ處迄アリ 雪ハ可通、夏ハ石間道路遠く川浅シ』

【天之穂日誌】 ケ子ブチ『ケ子は赤楊（はんの木）、ブチはフトの訛り也。此川赤楊多きが故に号るなり』

【松浦取調図】 ケ子ブチ

【關幽日記】 ケネブツ『右方ニ大河アリ。「ケネブツ」ト云フ。蓋シ源ヲ石狩ニ發ス。故ニ冬季石狩ニ行クモノ概ネ此川ニ沿ヒ雪ヲ踏デ上ルト云フ。』

【永田地名解】 ケネニペツ『赤楊川』

各々の言い方に微妙な違いが見られるが、語源は「永田地名解」にあるようにケネニ（赤楊の）ペツ（川）ではなかろうか。ケネニペツを早く言うとケネブチと聞こえ、松浦武四郎もケ子ブチで『赤楊多きが故に号るなり』とある。

近藤重蔵・佐藤正克は、冬季に石狩に行くにはこの川に沿って、雪を踏んで行くことができるとしている。

レイヨヤネ

【天之穂日誌】 リイチャニ『此处ニシハコロの村也（二股より九丁計）。上陸して乙名の家を見るに、誰も住ざるが故に家根腐れて内には虎杖・若竹等多く生茂りたり』

【松浦取調図】 リイヨウ

レイ・オ・ヤ・ニで「その道が・そこで・陸に上る・所」の意と思われる。位置は合流点から約1km上流寄りの右岸。

「天之穂日誌」によると、松浦武四郎は1857年（安政四年）旧暦6月19日に、ここのニシハコロの家に宿泊している。その家は誰も住んでおらず、家根も腐れていたなのでそのそばに野宿しようとしたが、蚊が多くて食事もできない始末。しかたなく家に入り火を燃やして泊まったが、明け方前に雨が降り出し、滝のような雨漏りにどうしようもなく、ずぶ濡れになってしまったとある。

武四郎は次の日、剣淵川を五十町余り上って大体の地形を見て、合流点へ引き返している。



松浦武四郎宿营地（北町北6号）

パナパオマナイ・ペナパオマナイ ⇒ パナパオマナイ沢

【天之穂日誌】 ブイタウシナイ『フイといへるもの多きよりして号る也』

合流点から2km上流左岸にある二つの溪流。平成7年度に砂防ダムが作られ、表示板に“パナパオマナイ沢”の地名が見られる。ブイタウシナイの名のとおりプイ（やちぶき）の多い沢である。

更科源蔵氏は「士別市史」の中で、パナ（川下）・ペナ（川上）・パ（崎）として、「川下の崎にある川」「川上の崎にある川」と訳している。

ポンヌタブ

ペナパオマナイの上流にあった川の湾曲内の土地。ポンは小さい、ヌタブは湾曲部なので“小さい湾曲部”と訳す。上流部にあるホロノタ（ポロヌタブ、大きい湾曲部）に対応していた。このような湾曲部は河道の直線化工事によりすっかりなくなってしまった。

キトタウシュナイ⇒北西川

【天之穂日誌】キトウシナイ

【松浦取調図】キトタウシュナイ

さらに2 km 上流、左岸の川が北西川である。

千田 稔氏は「剣淵川水系の川の名～剣淵川治水史」の中で、『ホクセイと読むのではなく、キタニシとアイヌ語地名に近い読み方が本当ではないか』としている。

キトは“キトピロ”でギョウジャンニク（通称アイヌ葱）のこと。タは採る、ウシはいつもする、ナイは沢で「いつもギョウジャンニクを採る沢」の意である。

アイヌの人達は、ギョウジャンニクの茎をご飯やおかゆに炊き込んで食べたり、「トマ」というエゾエンゴサクの根や豆と一緒にアザラシやニシンの油で煮て食べたという。また、強烈な臭いは魔物もこれを避けると信じられ、病気がはやり出すとこれを戸口にぶら下げたり、枕に入れて病魔を追い出そうとしたとある。

モヤサム

モイ・アサムで、モイは川の曲り角の水のゆるやかに流れている所、アサムは底とか奥の意で「川の曲り角で水がよどんでいる所」をいう。明治5万図を見ると、ちょうど川が逆S字形に蛇行している部分である。

河川改修工事により、この蛇行部分はなくなってしまったが、かつての旧河道（現在のチューブス川）の士別市街地寄りに、「屯田兵家族上陸の地碑」がある。

明治32年7月1日、屯田兵家族の老幼婦女子は、剣淵村ビバカルウシ福井橋のたもとから、丸木舟数隻に分乗して剣淵川を下り、旧観月橋の船着場に上陸したのである。



砂防ダムの表示



ギョウジャンニク（アイヌねぎ）



屯田兵家族上陸の地跡（士別市西4北5）

シブノチ・シシテンブシ

⇒ チューブス川

【松浦取調図】 シュブンテシ

千田 稔氏は「剣淵川水系の川の名～剣淵川治水史」の中で、シブノチはシュブン・オチ (shupun - Ot - i) の訛ったもので「うぐいの多い川」の意としている。

またチューブスという現在名は、もしかすると“シブノチ”のノをーと読んだ逆さ読みではないかと指摘している。さらに、明治5万図にあるシシテンブシも明らかに“シブンテシシ”(うぐい止めの多い川)を逆さに書き違えたとしか考えられないとしている。

しかし山田秀三著「北海道の川の名」によると、チューブスはチュッチュプス（とくさ群生する）から転訛したという説もある。

読み違い、書き違いがあったと思われるが、チューブス川は昔は“うぐい”の多いきれいな川だったのではないだろうか。



チューブス川

パンケヤルカルウシュナイ ⇒ 新学田川

【天之穂日誌】 ヤレカルシナイ

【松浦取調図】 ヤルカルシナイ

士別市の対岸に西から出ている川、パンケ・ヤル・カル・ウシ・ナイで「川下の木皮をいつも取る沢」の意。

ペンケヤルカルウシュナイ ⇒ 不動川

前者より少し上流で並んで剣淵川にそそぐ川。「川上の木皮をいつも取る沢」の意。お不動さんの辺りは今も樹木の多い所であるが、当時は針葉樹林の密生した沢だったに違いない。

パンケシポトツ ⇒ 南士別川

【松浦取調図】 シュポトツタ

明治5万図には十五線川の方にパンケシポトツとあるので、南士別川はパンケシポトツであったろう。シポトツはシベ・オツ (shipe - ot) 「鮭・多い」の急言と考えられ、「川下の鮭多くいる川」の意である。「松浦取調図」では右支流として、シュポトツタと書かれている。

ペンケシポトツ ⇒ 十五線川

「川上の鮭多くいる川」の意。

ホロノタ

剣淵川はJR鉄橋上下流で大きく蛇行して流れていた。この曲った川に囲まれた土地がホロノタ（ポロヌタツプ、大きい湾曲部）である。先のポンヌタツプ（小さい湾曲部）と対になっている。

ニナラパオマナイ ⇒ 東十二線川

【闘幽日記】井ナラパウマー『右ニ三派ノ流水アリ。一ハケ子ブチ、一ハエウブヌシペ、一ハ井ナラパウマーナリ』

東の山地から犬牛別川の対岸に出ている小川。小さな沢であるが、地形的に或いは生活上重要な川だった可能性がある。ニナラ・パ・オマ・ナイで「高台の・出崎に・ある・川」の意である。

士別市の東側の丘がここで剣淵川に接する地点で、これより南にかけて山は次第に高くなっていく。

佐藤正克は、明治5年旧暦12月25日ここを訪れ、山頂から『西北ニ羽幌山（苫前郡ノ内）真西ニ雨龍ノ諸嶽ヲ見ル』と記している。

オナウケオチ

明治5万図ではニナラパオマナイの南にある台地を指している。「士別市史」には、イナウ・ケ・ウシ（木幣をいつも削るところ）の間違いだとして、ここで木幣をつくり秋に犬牛別川に鮭の溯るのを迎える祭りをしたとある。

「永田地名解」では広尾町の例として、“オナウケオッペ”（蔓掛）で山道の入口にブドウ蔓を掛けてよじのぼった所とある。

いづれにしても、祭りごとを行った台地を指しているものと思う。この付近を歩いてみると、そのような祭りごとにあふさわしい形のよい丘がいくつかみられる。

ピタルンナイ ⇒ 東九線川

ピタラ・ウン・ナイで「川原・ある・川」の意。佐藤正克はニナラパオマナイ通過後、午後にこの辺りで昼食をとって一休みしている。『又十余町、時巳ニ午ナリ、乃チ林樹ノ下、溪流ノ畔ニ踞シテ飯ス』とあり、この溪流はピタルンナイか次のオピタルンナイを指している。



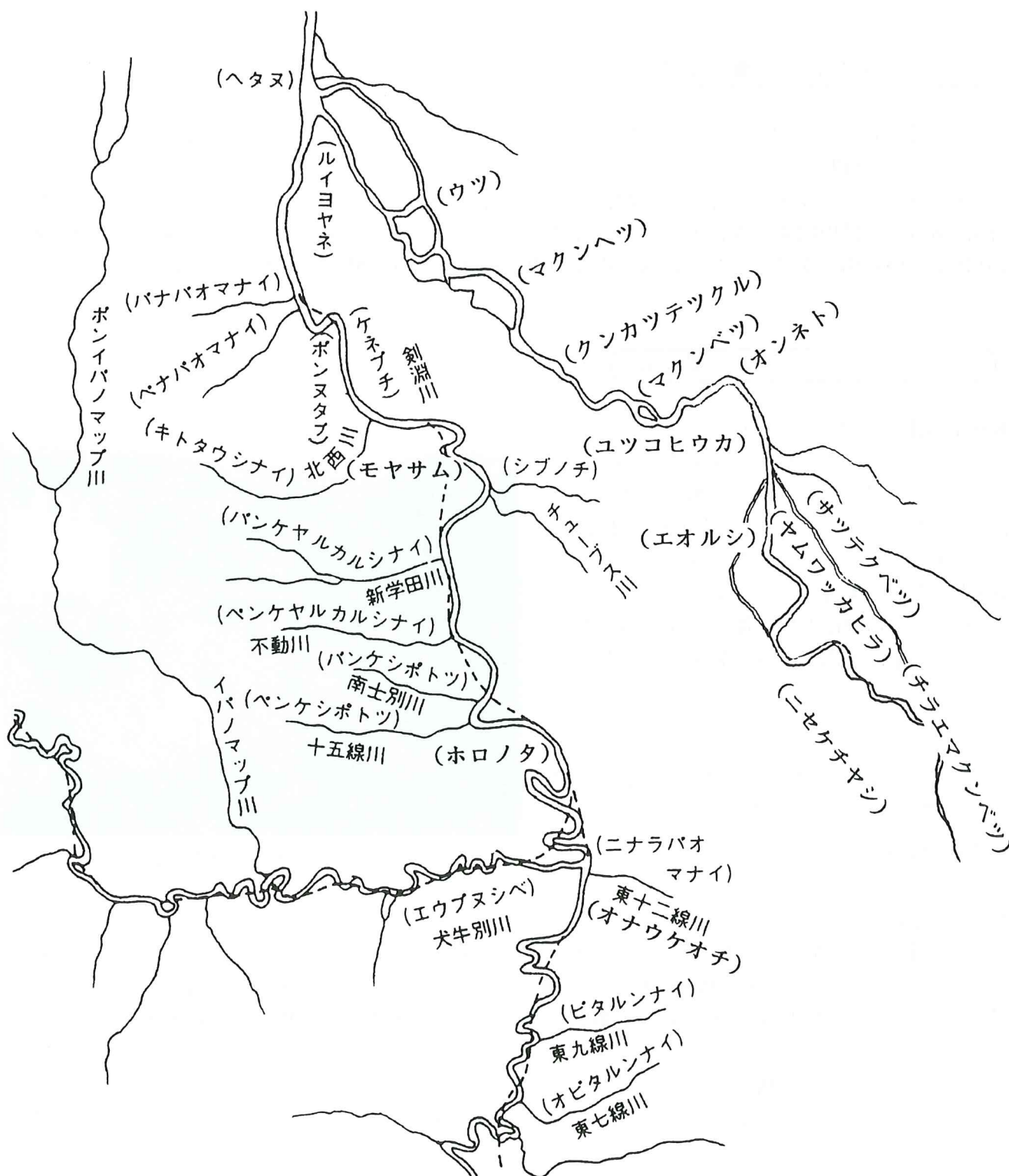
北剣淵の丘陵地



東九線川

千田 稔「剣淵川水系の川の名～剣淵川治水史」による

千田 稔「剣淵川水系の川の名～剣淵川治水史」による



オピタルンナイ ⇒ 東七線川

オ・ピタラ・ウン・ナイで「川下に・川原・ある・川」の意。ピタルンナイと兄弟のような川で、ともに砂利川原であったことが分かる。

ポンシルトルマップ ⇒ 彌栄川

【闢幽日記】パンゲシリトロマ『飯後「パンゲシリトロマ」及ヒ「ペンゲシリトロマ」河ヲ渉ル。樺雁皮等ノ樹頗ル多シ』

シリ・ウトル・オマ・プで「山の・間に・ある・川」の意。ポンがつくので小さい方の川を指す。“山の間にある”とは山田秀三氏によると、「山に登って行っている」状態で、一つの山塊を切り込み奥深く入り込んでいる場合が多いとしている。山塊の周りを流れている川より小さいことが多い。

オンネシルトルマップ ⇒ 刈分川

【闢幽日記】ペンゲシリトロマ

オンネは年老いたという意味であるが、ここではポンに対して大きい方の川を指す。古くはパンケ・ペンケで「下手・上手」、後にはポン・オンネで「子・親」となり、アイヌ語も時代とともに変化するようである。

この二つの川が山と山の間を流れていたの
で、剣淵川東岸の山地の部落名を“シルトル
マップ”と呼んでいた。

ビバカルウシ ⇒ ビバカラス・美羽烏

【天之穂日誌】ヒハカルウシ

【松浦取調図】ピバカルシ

【闢幽日記】ビバカルシ『又行里許「ビバカルシ」ニ至ル。「ケネブチ」河眼下ニ在リ、聞ク、夏日土人舟ニ棹シテ来リ鱒魚、桃花魚ヲ漁シ、或ハ林中ニ入り百合雁皮等ヲ採取スト』

東二線川は、刈分川とほぼ同地点で剣淵川に合流する。この川は、剣淵川の捷水路掘削後の旧川から山に入っていく。この川の付近をビバカラスといった。字名に“美羽烏”と書く。ビバ・カル・ウシで、「沼貝を・取る・いつもする所」の意である。

往時、アイヌの人達が丸木舟で遡り、沼貝を取って帰る慣わしだったのだろう。明治初期、この地点は剣淵川筋の交通の要所であった。



ビバカラスの舟着場跡

「剣淵町史」によると、アイヌの人達はビバカルウシ刈分付近に一戸、難波田橋の近くに数戸“拌み小屋”を建てて住み、丸木舟で和人に交通の便を与えていたという。河辺には回漕店・商店・飲食店・請願巡査駐在所が並び、士別方面への建築資材・食糧は専らこの地から積み出されたもので、士別屯田もここで舟に乗り、士別村に向かった歴史的な地であるとされる。

ワッサム⇒六線川

【天之穂日誌】 シイワツシヤム

【松浦取調図】 シイワツシヤム

【關幽日記】 ワシシャマ『此際地勢一高一低。溪流縦横セリ。之レヲ距ル里許、大沢アリ。又行ク里許、日漸ク西山ニ傾ク。乃チ沼沢ノ畔ニ露營ヲ結ビ榛樹ヲ剥ギ風雪ヲ防ギ以テ宿ス。東方ニ峻嶺アリ。「ワシシャマ」ト称スト云フ。廿六日晴、微シク風アリ。……此日曉発、行ク二丁余、「ワシシャマ」河ニ至ル。』



拌み小屋

小屋のかたちが、手を合わせたようなかっこうから拌み小屋と云われるが、別説には厳寒時にはわずかな火種に手を合わせてふるえていなければ、越冬できなかった処から拌み小屋と名付けられたと言う説もある

「風連町史」より

【永田地名解】 ワッサム『楡樹ノ傍』

剣淵川右支流として最大の六線川は、明治5万図にワッサムと書かれている川である。千田 稔氏によると、「天之穂日誌」「松浦取調図」のシイワツシヤムがそれに該当するという。そして、「松浦取調図」にはシイワツシヤムの上流にルークシワツシヤムと書かれているが、この川が地形から考えて現在のワッサム川ではないかとしている。

佐藤正克はビバカルウシ通過後、この地に入る。「關幽日記」中の“大沢アリ”はパンケペオッペ川との合流点で、露營した“沼沢ノ畔”は、六線川下流右岸であったと思われる。東方の峻嶺「ワシシャマ」は東に連なる丘陵地を指し、「ワシシャマ」河は六線川ということになる。

ルークシワツシヤム⇒ワッサム川

【松浦取調図】 ルークシワツシヤム

前説を採れば、ルークシワツシヤムが六線川の支流ワッサム川となる。しかし分らないのは、「天之穂日誌」「松浦取調図」にあるワツシヤムとポンワツシヤムの二川である。ビバカラスから六線川の間で、東から剣淵川に流入している名のつくような河川は見当たらないのである。もし、これが西から流入している河川だとすれば、パンケペオッペとペンケペオッペとも考えられるのだが……………。

パンケペオッペ⇒パンケペオッペ川

剣淵原野を流れるこの川は、犬牛別川下流部に当たる山地から発し、剣淵川とは反対の南東に流れて低湿地をつくった。

ペオッペ (pe - ot - pe) は「水がにじみ出る川」の意で、パンケなので川下の方を指す。

ペンケペオッペ⇒ペンケペオッペ川

パンケペオッペの支流で、南西の方向から合流している。「川上の水がにじみ出る川」の意。昔は次の辺乙部川をペンケペオッペと呼んでおり、明治5万図もそのようになっている。

シウキナウシナイ ⇒ 辺乙部川

【松浦取調図】 シュウキナウシナイ

【永田地名解】 シュウキナウシュナイ

『蒲澤』

昔はこの辺りは大湿地帯で、容易に入り込める土地ではなかったものと思われる。シウキナ・ウシ・ナイで「えぞにゆう草・群生する・川」と解される。あるいは、「永田地名解」のように一面の蒲(シキナ)沢だったのかも知れない。

この川は、「北海道殖民地選定報文」(明治24年道庁発行)では、“エヌプカヤマ”(上流が野にある川)と書かれている。そうなれば、シュウキナウシナイ(松浦取調図)→エヌプカオマナイ(北海道殖民地選定報文)→ペンケペオッペ(明治5万図)→辺乙部川(現在)と4回も名前が変遷したことになる。

千田 稔氏「剣淵川水系の川の名～剣淵川治水史」によると、辺乙部川上流の“福原”を、以前は“覚礼原野”と称していたという。いわゆる、隠れ原野で山峡を抜け出たところに、ひっそりと低湿の原があった。現在その名は図上から消えたが、嚙伊尻山の北側に“隠山”(556.6m)としてその名を残しているという。エヌプカオマナイ(上流が野にある川)の野とは、“福原”辺りを指しているものと思われる。

シブヌンナイ ⇒ シブンナイ川

【關幽日記】 シュブニウンナ井『「ワシシャマ」山アリ其東麓ニ從フテ行ク数里「シュブニウンナ井」河ニ至ル。此間小流頗ル多ク傍近山ヲ見ス』

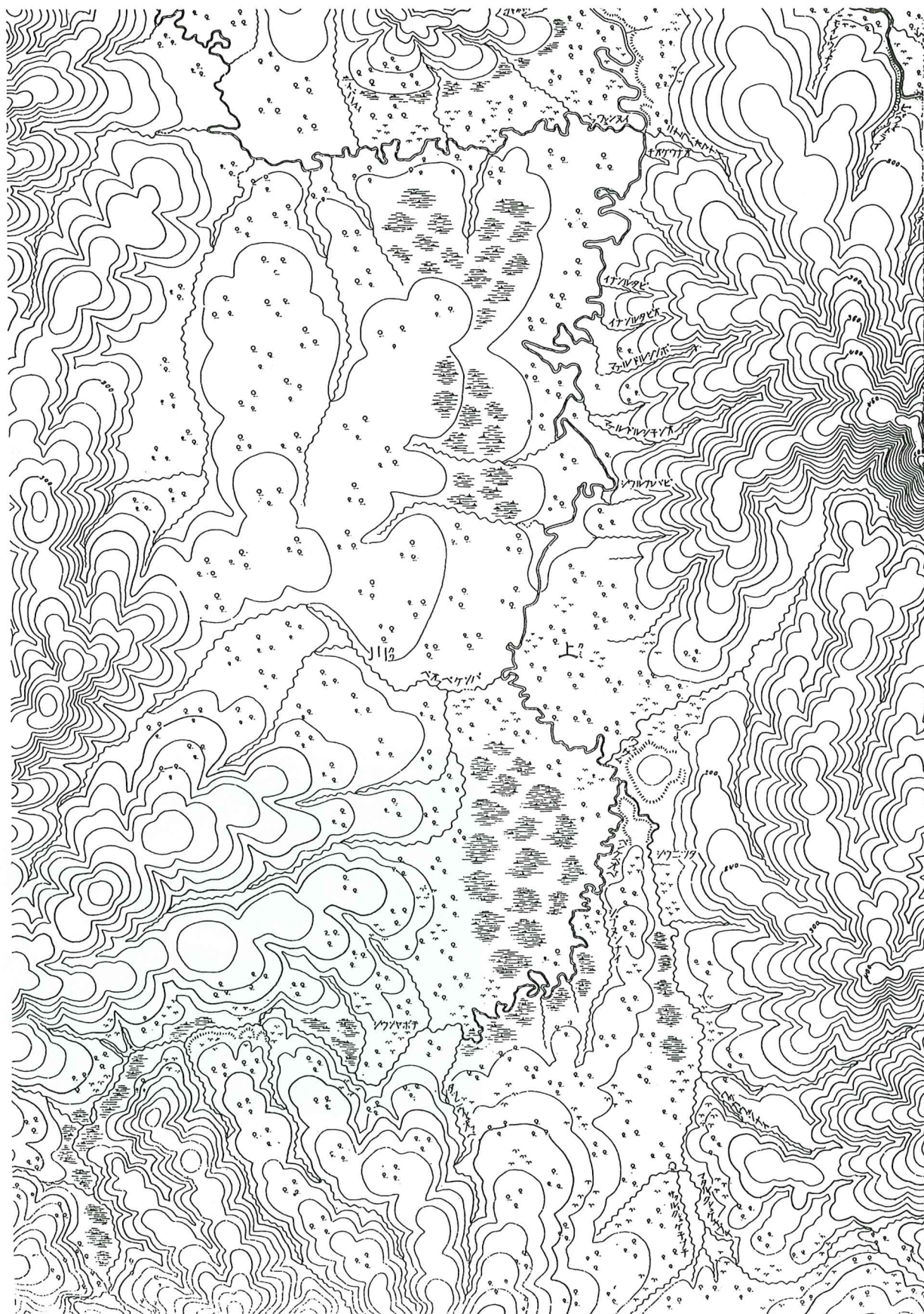
シュブン・ナイで「うぐい魚の・川」の意である。佐藤正克は和寒山麓沿いにシブンナイ川に至ったとあるが、山麓沿いにこの川はなく、また小川の多いのは山麓沿いなので、「關幽日記」の“シュブニウンナ井”と現在のシブンナイ川とは同一河川ではないことが分かる。



ペンケペオッペ川



辺乙部川 (ペオッペ川)



現在図幅名「剣淵」

タツニウシュオッペ ⇒ タツネウシベオッペ川

タツ・ニ・ウシ・ベオッペで「樺の・木・群生する・水多き川」の意。

チポヤンウシ

チブ・オ・ヤン・ウシで「舟が・そこで・陸に揚がる・いつもする所」の意。舟揚場である。現在の和寒町“菊野”辺りで、士別の方から丸木舟で剣淵川を遡ってきたアイヌの人達は、いつもここで舟を陸揚し、そこからは陸路を通ったものであろう。

タツニウシ

タツ・ニ・ウシで「樺の・木・多い所」の意。

ワクカウエンナイ ⇒ ワッカウエンナイ川

ワッカ・ウエン・ナイで「水・悪い・川」の意。佐藤正克は旧暦12月26日、ワシヤマ山（和寒山）の東麓に沿って“シュブニウンナ井”河に至るとあるが、千田 稔氏はそれはシブンナイ川ではなく、ワッカウエンナイ川の間違いであったと指摘している。

前述したように和寒山麓にシブンナイ川はなく、タツニウシをはじめ小川の多いのは山麓沿いなので、この説は正しいと思われる。

サクルークシュケネブチ ⇒ サクルシュケネブチ川

【天之穂日誌】 サツクルーケ子フチ

【松浦取調図】 シヤムクシケヌフシヤ

サク・ルー・クシュ「夏の・道・通る」ケネブチ川で、アイヌの人達は夏に丸木舟で合流点近くまで上って、そこで舟を陸揚し、この川筋を歩いた。ところで、サクルーはほとんどの地図がそうであるように、現在の中和・南丘両貯水池のある上流部を指しているが、果たして正しいのであろうか。

千田 稔氏は、サクルーは“四号川” だったのでないかとの仮説を立てている。その理由は、マタルー経由蘭留北十五線までの距離が10km 中和経由は14km となって、夏道は4km も遠回りすることになる。四号川経由だと、マタルー経由とほぼ同じ11km になると指摘している。



剣淵川上流部（南丘貯水池の奥）

そこで明治5万図をよく見ると、確かにサクルークシュケ子ブチとマタルークシュケ子ブチは隣り合っ
て書かれており、四号川がサクルーだった可能性は否定できない。

ところで不思議なことに、今頃になってそのことが明らかになったからではあるまいが、最新版（平成
8年修正）の5万分の1地形図「比布」ではサクルシュケネブチ川の名が消えており、以前その名が書か
れていた上流部には“剣淵川”と書かれているのである。

マタルークシュケネブチ⇒マタルクシュケネブチ川

【天之穂日誌】マタルウクシケ子フチ 『共に石狩上川アイヘツ（愛別）え山越のよし也。其辺さして難所
もなしとかや。此処をこして石狩のヒ、（比布）え行たる土人は今も此辺に多し。此処のニ
シハコロも二度程此処よりこしたりと云。』

【松浦取調図】ルウクシケ子フチ

マタ・ルー・クシュ「冬の・道・通る」ケネブチ川で、冬期間アイヌの人達が比布へ越えるときは、現
在の国道40号線沿いのこの川筋を通った。佐藤正克を案内したニシパコロも、冬に凍ったこの道をたどっ
て行けば、塩狩峠を越えることができたのに…………。

「關幽日記」には、『一大河アリ、乃チ「ワシシャマ」山ノ儘ル所也。河水合ス、乃チ踏テ之レヲ渡ル。
此ヨリ地勢大ニ開ケ、西南及西北ニ富リ遠ク雨竜山及ビ石狩ノ諸山ヲ見ル』とあり、一度はマタルーに出
ながらこれを渡ってしまい、和寒町“中和”方面へと入り込んだのである。

ワッカウエンナイをシブンナイと間違え、さらにマタルーも越えて、この辺りから道案内のニシパコロ
の記憶があいまいになってくる。

マタルーを越えた後、『往ク数、又二大河アリ、皆「ケネブチ」ノ上流ニシテ其源ヲ石狩川ノ背後ニ発
スト云フ。所謂「ケネブチ」ハ其地方ノ名称ナリ』とあり、この二大河は“サクルーこと四号川”と“六
号川”であったと思われる。

千田 稔氏は「剣淵川水系の川の名～剣淵川治水史」の中で、サクルーは四号川だったのではないかと
の仮説を立て、佐藤正克の行程を次のように分析している。

六線川（ワシシャマ川）下流右岸で野宿した翌日、はば現国道沿いに南下し、ワッカウエンナイ川をシ
ブンナイ川と誤って教えられ、これを渡った。それから剣淵川沿いに一度はマタルーに出ながら、道案内
のニシパコロの記憶違いから、サクルー（四号川）も越え、現在の六号川筋に入った。そしてその支流の
“新川”付近の山の麓で2日目の雪中露営となる。『又行里余、日漸ク西山ニ傾ク。因テ露営ノ地ヲ相スル
ニ會テ椶葉ナシ。止ヲ得ズ溪流縦横ノ間ニ一小郭ヲ求メ其麓ニ宿ス』とある。

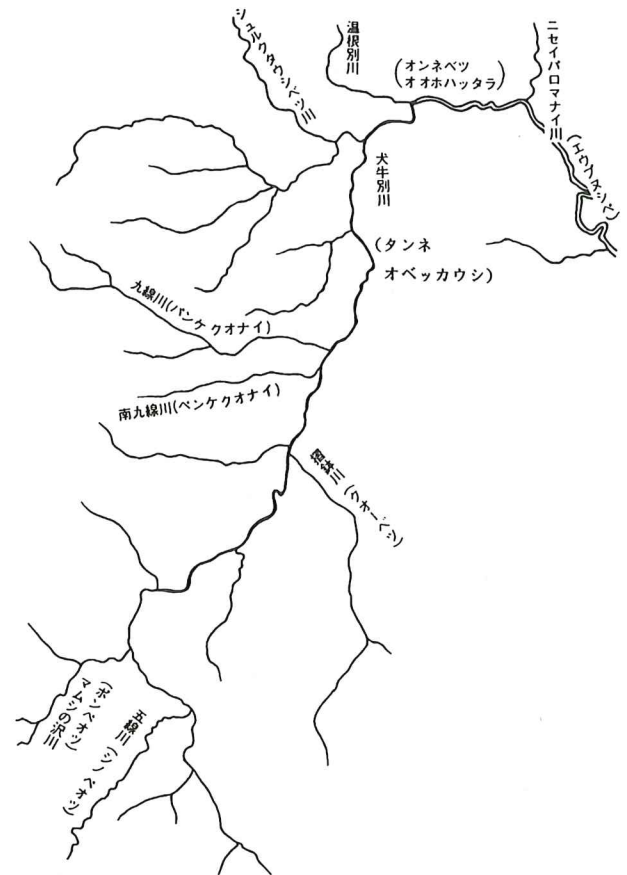
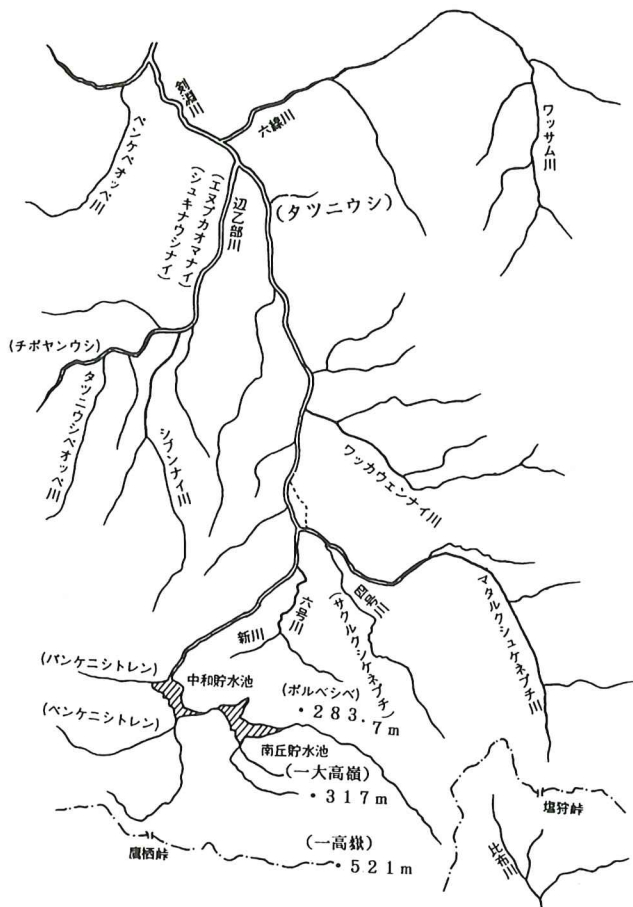
翌27日の朝、深雪をこいで、とにかく南に行けば上川の盆地が見えるはずと『“一高嶺”（ポルベシベ
ブト、283.7m）ヲ踰ユレバ大沢（剣淵川上流）アリ、沢畔榛樹多シ』となる。これを渡って、さらに対岸
の山“一大高嶺”（317m）に登るが、その向こうがまた山であり、『又当前“一高嶺”アリ（NTTの電波
塔のある山、521m）西南ヲ塞ク。唯「シベツ」地方ノ諸峯ヲ背後ニ下看スルノミ』という結末となる。

「關幽日記」と「松浦取調図」を熟読すると、上記のような結論が得られるのであるが…………。

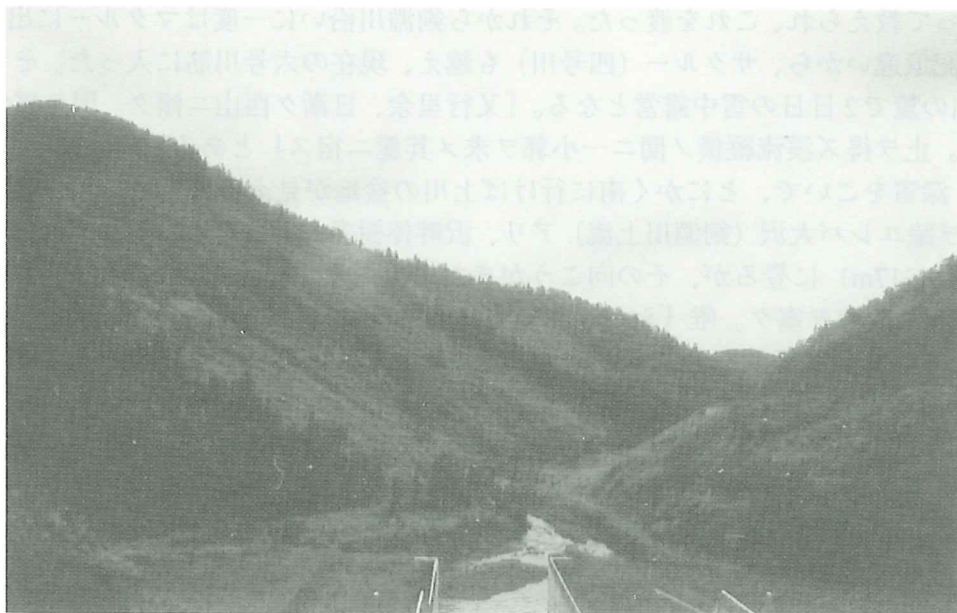
ところで、「松浦取調図」にはニシトレンとペンケニシトレンの河川名が出ているが、千田氏は中和貯
水池に流入している二つの溪流ではないかとしている。意味は不明であるが、女性の名前のような響きで
優雅さが感じられる。そして、その先が“ラムル”（蘭留）となっている。ラン・ルで「下る道」の意で
ある。昔、石狩地方から天塩川筋へ行くのにこの沢を上り、天塩川から石狩へ越えるにもこの沢へ出たの
で、そう呼ばれたのである。

剣淵川上流部

犬牛別川上流部



千田 稔 「剣淵川水系の川の名～剣淵川治水史」による



犬牛別川上流部（俗称：伊文コタン）

イヌンウシュベツ ⇒ 犬牛別川

【天之穂日誌】 ウブヌシへ『本名イウヌシベツなるべし。此処また二股に成る也。右の方本川、左りの方少し小さし』

【松浦取調図】 イウヌシベツプト

【關幽日記】 エウブヌシペ

【永田地名解】 イヌンウシュベツ『漁人ノ假小屋アル川』

イヌン (inun) は、「永田地名解」では“漁人の仮小屋”、知里真志保著「地名アイヌ語小辞典」では“漁のために水辺に出向いて滞在する”とある。

しかし、千田 稔氏は古い記録をたどり、「永田地名解」以前の呼び名を幾つかあげて、イヌンではなくてエウプン (eupun) かウプンであったとしている。

人口の希薄なこの内陸の地に、漁の仮小屋が沢山あったのはおかしい。また近くの天塩川のウツという所は、小石川で鮭・鱒・アメマス・イトウ等の産卵場所に近く、漁業のしやすい場所であり、水の深い犬牛別川までわざわざ来て滞在するとも思えない。そして、この辺りは冬季の北西風が特に強く、いつも強い風にさらされて吹雪の多い所であるとして、ウプン・ウシ (upun - ush)「吹雪の多い所」であったのではないかと指摘している。

イパノマプ ⇒ イパノマップ川

【天之穂日誌】 バナヲマナイ

【松浦取調図】 イパナヲマ

“中の沢”を流れる川をいう。イ・パン・オマ・プで「その・川下の方に・ある・もの」の意。何の川下かと言うと、合流点から5km程上流の峡谷を指すものと思われる。

現在の西士別町は、開拓の初めはイパノマップと呼ばれていた。

ポンイパノマプ ⇒ ポンイパノマップ川

“東の沢”を流れるイパノマップ川の支流で、「小さいイパノマップ」の意。

ニセイパロマナイ ⇒ ニセイパロマナイ川

【天之穂日誌】 ニセイパロマフ『兩岸峨々たる岩壁のよし也』

【松浦取調図】 ニセイパロマプ

ニセイ・パロ・オマ・ナイで「峡谷の・口に・ある・川」の意。現在車で走ると、それほど峡谷とは思えないが、「天之穂日誌」には『峨々たる岩壁』とあり、この峡谷を越えるのは大変だったことを偲ばせる。

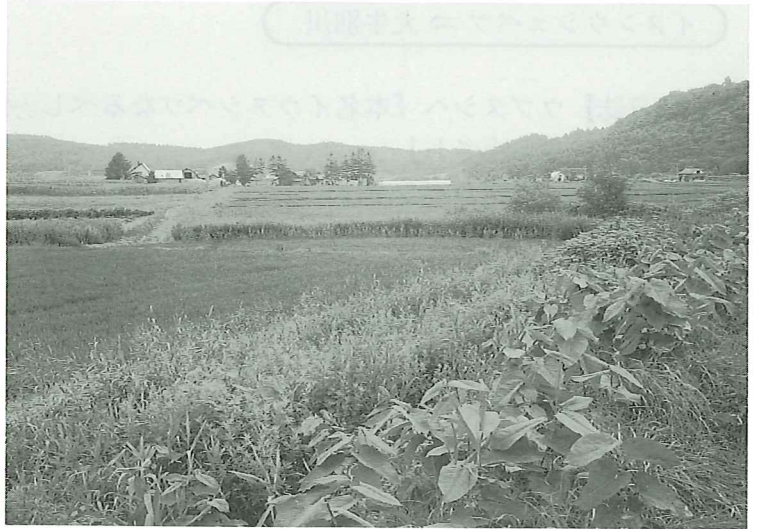
大正の頃から“北静川”と呼ばれる。剣淵町には“東静川”（東十線川）がある。



ニセイパロマナイ川

オンネベツオオホハッタラ

ニセイパロマナイ川と温根別川の間の犬牛別川をオンネベツ・オオホ・ハッタラと言った。オオホ・ハッタラは「深い・淵」の意で、当時の犬牛別川は蛇行して峡谷の上流でよどんで淵となっていたものであろう。現在は真直ぐな川となり、川原である。



オンネベツ ⇒ 温根別・温根別川

【天之穂日誌】ラン子ベツ

【松浦取調図】ラン子ベツ

犬牛別川の北支流であるが、長さも一番長く、流域面積も最大の川である。オンネは「年老いたる」「大きい」の意で、雨竜川水源地への通路である。本来は、この川がルークシュオンネベツであった。

オオホ・ハッタラの跡

ルークシュオンネベツ⇒十一線川

【松浦取調図】ルウクシラン子ベツ

【永田地名解】ルークシュオンネベツ『路ヲ流ル老大川』

「松浦取調図」では右支流になっているが、左支流の間違いである。ルー・クシュ・オンネ・ベツで「道・通る・大・川」の意。明治5万図から温根別川支流の“十一線川”を指すようになった。“丸山”（エアネヌプリ……頭の細い山）から温根別川にそそぐ小川である。しかし、ルークシュオンネベツとしては、いかにも小さすぎる。

オロウエンベツ ⇒ オロウエンベツ川

オロ・ウエン・ベツで「その中が・悪い・川」の意。川の中が歩きにくい川をいう。

シュルクタウシュベツ ⇒ シュルクタウシベツ川

【天之穂日誌】シュルクタウシベツ『毒草多きが故に号る也』

【松浦取調図】シュルクタウシナイ

【永田地名解】シュルクタウシュベツ『附子川』

「松浦取調図」ではシユルクタウシナイで右支流になっているが、これも左支流の間違いである。シユルク・タ・ウシ・ペツで「とりかぶとの根を・掘る・いつもする・川」の意。

シユルク又はスルクはアイヌが毒矢に使った“とりかぶと”の根の毒のことで、ここはその名産地であった。「士別市史」(更科源蔵氏)によると、とりかぶとには30余种あって、そのうち最も猛毒のあるのがオクブシとテリハブシの2種で、この川筋には昔それがあったという。



エゾトリカブト

タンネオベッカウシ

知里真志保著「地名アイヌ語小辞典」によると、オベッカウシとは「川岸が高い岡になって続いている所」とされる。タンネは“長い”の意で、そのような岡が長く続いている地形をいう。ここでは、温根別から白山方面にかけて東側に丘陵地が連なっているが、“昭南橋”以南の地形を指していると思われる。



クオーペツ ⇒ 摺鉢川

【永田地名解】クオナイ『機弓（アマボ）ヲ置ク澤』

温根別町「昭南橋」付近の丘陵地

ク・オ・ペツで「仕掛け弓を置く川」の意。クオーペツは「士別市史」によると、温根別村時代に南2線から5線辺り一帯を指した字名でもあった。



置き弓（「天塩日記」より）

パンケクオナイ ⇒ 九線川

【天之穂日誌】 パンケクヲナイ

【松浦取調図】 パンケクヲナイ

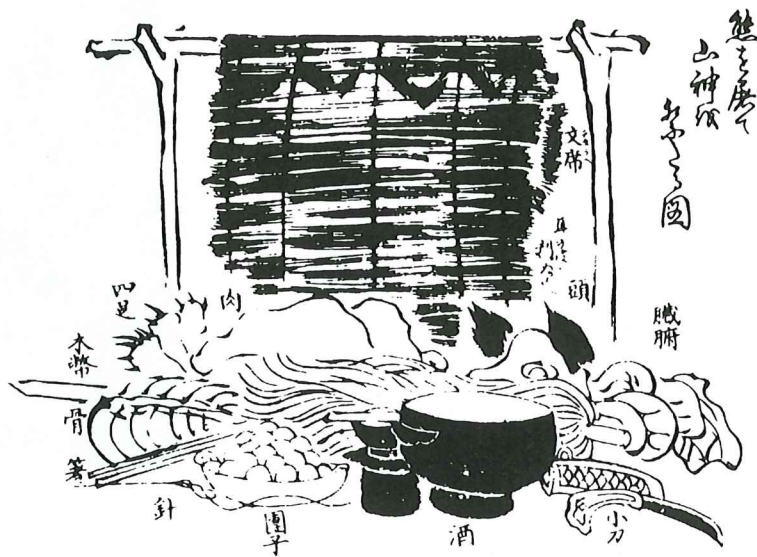
パンケ・ク・オ・ナイで「川下にある仕掛け弓を置く沢」の意。

ペンケクオナイ ⇒ 南九線川

【天之穂日誌】 ペンケクヲナイ

【松浦取調図】 ペンケクヲナイ

ペンケ・ク・オ・ナイで「川上にある仕掛け弓を置く沢」の意。この辺りにはクオベツ、クオナイという地名が多い。よほど熊が多くいたものと思われる。



熊を屠て山神を祭りたる図（「天塩日誌」より）

ポンベオツ ⇒ マムシの沢川

【天之穂日誌】 ホンヘヲツ

【松浦取調図】 ポンベヲツ

pon-pe-otで「小さい水がにじみ出る所」の意味ではないか。犬牛別山（イヌンウシュベツカムイヌプリ……犬牛別川の神山で熊の多い山の意）に発する川である。

シノベオツ ⇒ 五線川

【天之穂日誌】 シノヘヲツ『其源は石狩川筋ウリウ源え山越するよし。此処をウリウのカニシランケは常に越たるとかや』

【松浦取調図】 シイペヲベツ

shino-pe-otで「本流の水がにじみ出る所」の意味ではないか。坊主山（久襰山・クンネヌプリともいい、黒い山の意）から発する川である。

明治41年に岐阜県から団体入植して開拓が始められ、合併前は“イヌンウ”という片仮名で呼ばれていたが、士別市になると同時に“伊文”となった所である。犬牛別川の原因 eupun から名付けられたと考えられる。

名 寄



一万分十二尺割合
東京

北海道庁地理課

明治三十二年三月十三日
明治三十二年三月十三日
明治三十二年三月十三日

参 考 文 献

- 1、松浦武四郎 東西蝦夷山川地理取調日誌『丁巳天之穂日誌』 高倉新一郎校訂秋葉實解説『丁巳東西蝦夷山川地理取調日誌』上・下 北海道出版企画センター 1982年
- 2、松浦武四郎没後百年記念出版『武四郎蝦夷地紀行』 秋葉實解説 北海道出版企画センター 1988年
- 3、丸山道子訳『天塩日誌』 凍土社 1974年
- 4、士別町『開基五十周年記念 士別町史』 1951年
- 5、士別市『士別市史』 1969年
- 6、士別市『新士別市史』 1989年
- 7、風連町『風連町史』 1967年
- 8、風連ふるさとこぼれ話集『赤い川』1988年
- 9、朝日町『朝日町史』 1981年
- 10、剣淵町『剣淵町史』 1979年
- 11、和寒町『和寒町史』 1975年
- 12、上川支庁『北大河・テッシ～松浦武四郎まっぷ～』1997年
- 13、近藤重蔵『文化四年 丁卯 十月 天塩川川筋図』 東京大学資料編纂所『大日本近世史料』 東京大学出版会 1989年
- 14、佐藤正克『關幽日記』 高倉新一郎編『日本庶民生活史料集成』 第4巻 1969年
- 15、興津寅亮『明治二十八年四月 天塩川沿岸状況調査復命書』北海道史編集所『新しい道史』 1979年～1981年
- 16、松浦武四郎『東西蝦夷山川地理取調圖』 草風館 1988年
- 17、北海道内務部地理課『北海道地形図・名寄』 明治30年印刷 明治31年(1898年)刊(道庁20万図と略記)
- 18、陸地測量部『仮製5万分の1図・エアネヌプリ・チボヤンウシ・チライルイサン』 明治31年(1898年)製版(明治5万図と略記)
- 19、永田方正『北海道蝦夷語地名解』北海道聯合教育會 明治24年(1891年)
- 20、千田 稔『剣淵川水系の川の名～剣淵川治水史』北海道土木協会 1985年
- 21、北海道土木協会『北海道河川一覧』1984年
- 22、北海道開発協会『天塩川上流灌排事業誌』(上巻) 1990年
- 23、山田秀三『北海道の川の名』 電通北海道支社 1971年
- 24、知里真志保『地名アイヌ語小辞典』 北海道出版企画センター 1956年
- 25、更科源蔵『アイヌ語地名解』 みやま書房 1982年
- 26、本多 貢『北海道地名漢字解』 北海道新聞社 1995年
- 27、鈴木邦輝『天塩川流域のコタン分布～19世紀の文献資料から～』北海道地理 No58 1984年
- 28、鈴木邦輝『關幽日記考ー佐藤正克の足跡を探るー』士別市立博物館報告第二号 1984年
- 29、長谷川功・鈴木邦輝『覚書 天塩川沿岸状況調査復命書』士別市立博物館報告第三号 1985年
- 30、鈴木邦輝『近藤重蔵 天塩川川筋図についてのメモ』 名寄市郷土資料報告第七集 1992年
- 31、尾崎 功『士別市内における武四郎の事跡』 松浦武四郎セミナー資料 1997年

地名索引

- (ア) アイヘツ (愛別) 26・44
朝日六線川 4・24・31
朝日 30・31
アシユシキビイタラ 11・12
アシレムイ 24・29・31
(イ) 井ナラバウマー 37
イウヌシベツプト 23・46
一太高嶺 44・45
一高嶺 44・45
犬牛別川 4・38・41・45・46・47・49
イヌンウシュベツ 3・42・46・50
イヌンウシュベツカムイヌプリ (犬牛別山) 49
イヌンウ 49
イパナヲマ 23・46
イパナヲマナイタイベ 27・33
イパノマップ川 4・38・46
イパノマナイタイベ 3・27
イパノマナイタユベ 29・50
イパノマプ 3・42・46・50
伊文 45・49
糸魚 (いとい) 31
イベウイエナイ 6
彌栄川 (いやさか川) 4・39
イワオナイ 3・32
岩尾内川 4・32
イワナイ 32・33
イワヲナイ 32
(ウ) 上向川 (うえむき川) 4・11
ウツ 14・18・20・23・38
ウツカ 17・21
ウツナイ 14
ウブヌシヘ 46
ウリウ 11・13・49
(エ) エアネヌプリ (丸山) 13・20・47・50
エウブヌシベ 37・38・45・46
エオルシ 19・20・38・50
エヌプカオマナイ 41・45
エヌプカヲマ 41
エペウンナイ 3・6・13・50
エペウンナイ川 4・6・9
(オ) オオホウツナイ 3・10・14・20・50
奥土別 31
オサオト。ルマ 28
オサオトルマップ 3・28・29・50
オサツトワリ 3・29・31・50
オシキナウシ 3・29・32・50
オナウケオチ 37・38・42・50
オナウケオッベ 37
オピタルンナイ 3・38・39・42・50
オロウエンベツ 3・47・50
オロウエンベツ川 4・47
オンネシルトルマップ 3・39・42・50
オンネト 16・38
オンネトウ 16
オンネナイ 3・27・29・50
温根別 11・47・48
オンネベツ 3・47・50
オンネベツオオホハツタラ 45・47・50
温根別川 4・47
オーツナイ川 4・14
(カ) カアナイ 26
カアナ、イ 23・26
覚礼原野 (かくれ原野) 41
隠山 (かくれ山) 41
カネナイ 3・26・29・50
上土別遺跡 25
上土別二十七線川 4・24・28
カムイコタンヌプリ 24・29・30・50
嚙伊尻山 (かむいしり山) 41
神恵鉾山 30
刈分川 4・39
川北 25
川西五線川 4・22・24
カワニシ十一線川 4・22・24
(キ) キイカルウシナイ 22・23
菊野 43
北静川 (きたしずか川) 46
北西川 4・35・38
キトウシナイ 35
キトウシナイ 23・35・38
キトウシユナイ 3・35・50
キナケヤヲフシナイ 11・21
キナチャウシナイ 11・17・23
キナチャウシユナイ 3・10・11・13・50
キモマメム 25
キモメム 24・25・50
九線川 4・49
金川 4・25
銀川 4・25
(ク) クアマウシユナイ 3・6・13・50
クアマウシナイ 6・23
クマウシユナイ川 4・6・9
クオナイ 3・29・32・48・49
久尾内川 4・32
久尾内沢 32
クオベツ 49
クオーベツ 3・48・50
クマウシナイ 7
クワツマナイ 6・21
クワ、ウシナイ 6
クンカツテツクル 15・18・20・38
クンカワニクル 15・23
クンネヌプリ (久彌山) 49
(ケ) ケナウシケクシナイ 24・26・29・50
ケナシノシケクシベツ 26・33
ケナシハヲマ 32
ケナシパマ 3・29・32・50
ケナシパヲマプ 32・33
ケナシヨシケシヨマナイ 24・28・29・50
ケナシ川 4・32
ケヌチ 18
ケヌフチ 12・18・34
ケヌブチ 18
ケネナイ 3・27
ケネニベツ 34
ケ子フチ 14
ケネブチ 3・34・39・44
ケ子ブチ 34・37
ケネブツ 21・34
ケ子ブチ 23・34・50
ケネブチ 38
兼内 27
ケンナイ川 4・27
剣淵 34・35・40・46・50
剣淵川 4・34・38・39・40・44・45
(コ) 五線川 4・45・49
(サ) サクルシユケネブチ川 4・43・44
サクルーケシユケネブチ 3・42・43・45・50
サツテクナイ 43
サツテクナイ 17・23
サツテクベツ 17・18・38
サツテクベツ 17・20・50
サツテク橋 17
三郷川 4・24・26

(シ)	シイペヲベツ	23・49	トイヒラ	6
	シイワツシャム	23・40	トイピラ	6・9・23
	シウキナウシナイ	3・41・45	トツフトンナイ	7
	塩狩峠	44・45	トツフトンナイ	7・23
	シシテンブシ	36・50	トナイタイヘ	28
	シノヘヲツ	49	トナイタイベ	3・28・33
	シノペオツ	3・45・49	東内大部川	4・24・28
	シブノチ	3・36・38・50	トブツンナキ	7・21
	シブンナイ川	4・41・44・45	トワリ	3・29・32・33
	シブヌンナイ	3・41・42・50	登和里川	4・32
	シヘツ	14	トーフトナイ	3・7・13・50
	シベツ	14・21・44	トーフトナイ川	4・7・9
	士別	6・30・36・40・49・50	(ナ) ナイタイベ	3・5・12・27・33
	シベツヌカナン	18	ナイタユベ	27・29・50
	士別橋	15	ナイタユベ	27
	士別バンケ川	4・24・28	内大部川	4・24・27
	シベツ	20	ナイブト	7
	下川	19	中士別十線川	4・19
	シヤツチクベツ	17・18	中の沢	46
	シヤムクシケヌフシヤ	23・43	ナヨロ	12・17・21・23・50
	シュブニウンナ井	41	難波田橋	40
	シュブンテシ	23・36	(ニ) 似峽 (にさま)	27・31・32
	シュポトツタ	23・36	西士別町	46
	シュマララッペ	3・29・31・50	ニシトレン	23・44・45
	シュルクタウシュベツ	3・47・50	ニセイクシュナイ	3・11・13・50
	シユウキナウシナイ	23・45	ニセイバロマフ	46
	シユウキナウシュナイ	41	ニセイバロマナイ	3・46・50
	シュルクタウシナイ	23・47	ニセイバロマナイ川	4・45・46
	シュルクタウシベツ	47	ニセイバロマブ	23・46
	昭南橋	48	ニセウクシナイ	11
	シラツチセウニ	24・29・30	ニセクシナイ	11・23
	シルトルマップ	39	ニセヨクスナイ	11・21
	新川	44・45	ニセケチヤシ	20・22・38
	新学田川	4・36・38	ニセケチヤシノボリ	22・23
	新タヨロマ川	4・11・14	ニセヨチヤシノボリ	22
	シーベツ	14・50	ニタットンクシュナイ	3・25・29・50
	十一線川	4・24・25・47	ニナラバオマナイ	3・37・38・42・50
	十五線川	4・37・38	ニヨヒタラ	11・12
(ス)	摺鉢川	4・48	(ヌ) ヌカナン	23・25
(ソ)	ソウシベツ	23・24・26	ヌカナンブ	25
	ソウシベツヲマフイラ	26	ヌフリレ、マ	30
(タ)	タイオロオマベツ	5	ヌプリレロマナイ	3・29・30・50
	タツニウシ	42・43・45・50	ヌプリソロマナイ川	4・24・30
	タツニウシュオッペ	3・42・43・50	ヌプレオマナイ	3・28・29・50
	タツネウシベオッペ川	4・43・45	(ノ) ノウチセ	30
	タヨロマベツ	3・5・13・50	ノカナン	18・25
	タヨロマ	5・21・23	ノチセウニ	29・30
	多寄	5・10・11・14・50	(ハ) 白山	48
	タヨロマ川	4・5・9	白鳥の宿	7・8
	タンネオベツカウシ	48・50	ハクヌツ	17・21
	タンネスツ	11・21	ハシタアシ	5・12
	タンネビタラ	9・11・21	ハチヤシ	5・21
	大英川	4・24・30	ハッタラオマナイ	24・25・50
(チ)	チブニダイサン	15・18	ハツチャシナイ	3・5・50
	チボヤンウシ	42・43・45・50	初茶志内川 (はっちゃしない川)	5・9
	中和貯水池	43・44・45	初茶志内山 (はっちゃしない山)	5・13・50
	中和	44	ハンケヌカナン	25
	チュツチュプス	36	バナヲマナイ	46
	チュープス川	4・36・38	バンケクヲナイ	49
	チライウシルベシベ	31・33	バナバオマナイ	3・34・38・50
	チライルイサン	24・29・31・50	バナバオマナイ沢	4・34
	チライルウベシヤニ	31	パンケクオナイ	3・49
	チラエマクンベツ	20・22・23・38	パンケクヲナイ	23・49
(ツ)	ツ° ヲブトナイ	7・12	パンケシボトツ	3・36・38
	九十九山	16・17・19	パンケヌカナンブ	3・25・29・50
(テ)	テイネメム	24・25・29	パンケヌカナンブ川	4・24・25
	テイ子メム	23・25・50	パンケベオッペ	3・41・42・50
	天塩川	4・13	パンケベオッペ川	4・41
(ト)	ト° ナイタユベ	28・29・50	パンケヤルカルウシュナイ	3・36・38・50

	パンゲシリトロマ	39		ポルベシベプト (一高嶺)	23・44・45
(ヒ)	東九線川	4・37・38		ポロマクンベツ	15・23
	東静川 (ひがししずか川)	46		ポロメム	24・25・50
	東十線川	46		ポンイパノンマプ	3・46
	東十二線川	4・37・38		ポンイパノマップ川	4・38・46
	東七線川	4・38・39		ポンシルトルマプ	3・39・42・50
	東の沢	46		ポントン子ビタラ	11・12
	左の沢川	4・27		ポンテシヲ	14・21
	日向	7・8・11・16		ポントーフトナイ川	4・7・9
	日向温泉	7		ポンヌタブ	35・37・38・50
	日向川	4・9・11		ポンベオツ	3・49
	ヒハウシトライ	22		ポンペヲツ	23・49
	ヒハカルウシ	39	(マ)	マクンヘツ	15・20・38
	ヒ、(比布)	44		マクンベツ	16・20・38
	ビバカラス	4・39		マタルウクシケ子フチ	44
	美羽鳥	39		マタルークシュケネブチ	3・42・44・45・50
	ビバカルウシ	3・35・39・40・42・50		真狩川 (まっかり川)	5
	ビバカルシ	39		マッカリベツ	3・5
	ビウカ	16		マツシヤシ	5・23
	ビタラ	11		マムシの沢川	4・45・49
	ピタルンナイ	3・37・38・42・50	(ミ)	右の沢川	4・27
	ピバカルシ	23・39		南丘貯水池	43・45
	ピバウシトライ	22・23		南九線川	4・49
	ピバウシュトライ	3・22・50		南士別川	4・36・38
	ピーカルシュナイ	22・24・29・50	(モ)	モイレウシナイ	22
(フ)	フィタウシナイ	7		モイレウシュナイ	3・22・50
	フウレップ	5・12		モウリウシナイ	22・23
	フウレブ	5		モヤサム	35・38・50
	フウレベツ	5・21	(ヤ)	ヤムワッカ	17・19・23
	フウレベト。	5		ヤムワッカヒラ	17・19・38
	風連	5		弥生 (やよい)	5
	風連別川	4・5・9		ヤルカルシナイ	23・36
	福井橋	35		ヤレカルシナイ	36
	福原	41	(ユ)	ユウベウンヌ	6・23
	フシュコベツ	24・27・29・50		湯沢川	4・24・31
	不動川	4・36・38		ユツコヒウカ	16・18・20・38
	フレブ	5・23		ユツコビウカ	16・17・18
	フーレベツ	3・5・50		ユツコビウカ	16・23
	ブイラヤタ	26	(ヨ)	ヨヲロシ	18・19・20・23
	武徳	14		四号川	43・44・45
	ブイタウシナイ	7・9・13・16・23・34・50	(ラ)	ラムル (蘭留)	23・43・44
	ブイラオロ	24・26・29・50	(リ)	リイチヤニ	34
	プトピンニウシュナイ	3・11・13・50		リイヨウ	23・34
	プトララマニウシュナイ	3・29・30・50	(ル)	ルイヨヤネ	34・38・50
(ヘ)	ヘタヌ	14・20・38		ルウクシケ子フチ	23・44
	ベンケクヲナイ	49		ルウクシラン子ベツ	23・47
	ベンケヌカナン	31		ルベシナイ	17・19・23
	ベンゲノカナン	25・31		ルベシユベナイ	3・17・19・20・22・50
	辺乙部川 (ぺおっぺ川)	4・41・45		ルークシュオンネベツ	3・47・50
	ベタヌ	14		ルークシワツシヤム	3・23・40
	ベツモシリ	15	(ロ)	六号川	44・45
	ペナバオマナイ	34・38・50		六線川	4・40・44・45
	ペンケクオナイ	3・49	(ワ)	ワクカウエンナイ	3・17・19・20・42・43・50
	ペンケクヲナイ	23・49		ワシシヤマ	40・44
	ペンケシポトツ	3・37・38・50		ワッカウエンナイ川	4・17・19・43・44・45
	ペンケニシトレン	23・44・45		ワッカウエンベツ	17・19
	ペンケヌカナン	31・33		ワッサム	3・40・42・50
	ペンケヌカナンブ	3・29・31・50		ワッサム川	4・40・45
	ペンケヌカナンブ川	4・24・31		ワツナイ	14
	ペンケペオッペ	3・41・42・50	(ヲ)	ヲサウトルマ	28
	ペンケペオッペ川	4・41・45		ヲサウトロマ	28・33
	ペンケヤルカルウシュナイ	3・36・38・50		ヲサツテウシ	31・33
	ペンゲシリトロマ	39		ヲシキナウシ	32
(ホ)	砲大川	4・32		ヲシキナウシナイ	32・33
	ホロノタ	35・37・38		ヲン子ト	16・17・20・23
	ホンヘヲツ	49		ヲン子ナイ	27・33
	ホーウツナイ	14・21		ヲン子ベツ	23・47
	坊主山	49			
	ボロフシコベツ	6・12			

あ と が き

更科 源蔵氏は、その著「アイヌ語地名解」の中で、『地名は道標であり、古い時代の地誌であり、生活の歴史でもある。現在北海道中に残るアイヌ語地名の中から、それらの原形をさぐり、古代の生活の姿を復原しようとする』と述べている。

最近、一昨年前に公布された「アイヌ文化振興法」がきっかけとなり、各地で『アイヌ語地名を大切に！』という動きが高まっていると聞く。その理由は次の二つによる。

(1) 北海道の自然は、アイヌ民族がそれを初めて識別し、地名をつけ、アイヌ語で語り継がれてきた。

(2) アイヌ語の地名は、その場所の自然や環境・歴史についての正確な情報を与えてくれている。

当研究会としても、地元で開催された松浦武四郎フォーラムやセミナーに参加し、また110のアイヌ語地名を丹念に調べていく中で、その感を益々強くした次第である。

今後、この豊かな美しい郷土を環境破壊から守り、後世に残すためにも、その原形となつたアイヌ語地名を今一度見直す必要があるだろう。そして可能ならば、河川名や道路標識・駅名などについて、アイヌ語も併記するような方向で検討が進められることを願うものである。

執 筆 者 略 歴



尾崎 功

昭和18年、帯広市生まれ。昭和41年、北海道学芸大学旭川分校卒業後、旭川市内の中学校で社会科を指導。昭和57年、兵庫教育大学大学院修士課程修了。平成元年、上士別中学校勤務、士別市立博物館特別学芸員。平成9年、旭川市立春光台中学校教頭より校長として現在校に赴任。士別市立博物館協議会委員、士別市郷土研究会理事。同年、「松浦武四郎セミナー」で研究発表。

士 別 地 方 ア イ ヌ 語 地 名 考

発 行	1999年（平成11年）3月
発 行 所	士別市郷土研究会（責任者 荒 木 正 一） 事務局 〒095－0056 士別市西士別町2554番地 士別市立博物館 TEL（01652）2－3320
文 ・ 写真	尾 崎 功（士別市立中多寄小学校長）
編集・監修	水 田 一 彦（士別市立博物館学芸員） 山 田 伍 市（士別市立博物館特別学芸員）
協 力	松浦一雄氏（東京都目黒区） 国文学研究資料館史料館（東京都品川区） 松浦武四郎記念館（三重県三雲町）
印 刷	志村印刷株式会社（士別市大通東3丁目）